

佐久をもっと好きになる

佐久報 佐久

佐久の先人

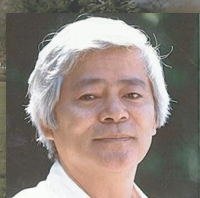
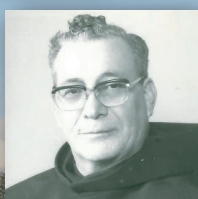
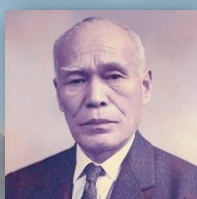
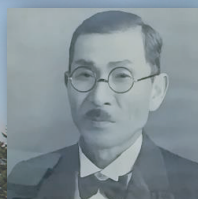
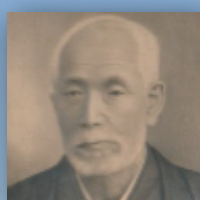
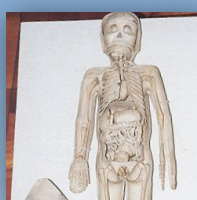
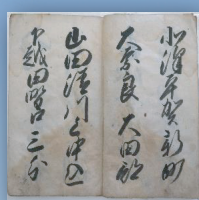
検討事業

SAKU NO MIJIKANA JOHO.

別冊

令和8年10月

KOHO SAKU



「佐久の先人」第四次選定 15 人の紹介

伴野（友野）友彦・・・P4
小林 文素・・・P6
木内 芳軒・・・P8
比田井 弾右衛門・・・P10
北原 丈衛・・・P12
市川 雄一郎・・・P14
井出 幸吉・・・P16
ガブリエル・ディアス・・・P18

渡辺 静・・・P20
佐々木 方子・・・P22
もろさわ ようこ・・・P24
原田 岸子・・・P26
井出 孫六・・・P28
山川 啓介・・・P30
土屋 竜一・・・P32

先人の紹介文作成にあたっては、なるべくエピソードや写真を踏まえ、読みやすさを考慮しております。文献・資料や寄せられた情報を基に、正確な記述となるよう心がけておりますが、万が一内容に事実誤認、問題等がございましたら、文化振興課までご連絡ください。

佐久の先人検討委員会・佐久市教育委員会

令和7年3月9日の新佐久市誕生20周年記念式典において、これまでの発展を振り返ると同時に、新たに「第四次の先人」15名を発表させていただきました。会場の皆様から寄せられた大きな拍手と温かい反響は、今なお深く胸に残っております。

今回選定された先人たちの中には、直木賞作家の井出孫六氏や作詞家の山川啓介氏、女性史を拓いたもろさわようこ氏、難病と闘い歌い続けた土屋竜一氏など、文芸や芸術、研究など多彩な分野において、佐久の名を全国へ響かせてくれた方々が多く含まれています。

先人の皆様が身を賭して遺して下さったメッセージは、私たちが、そして子々孫々に至るまで佐久に暮らす人々が新たな一步を踏み出すための偉大な力です。

この広報別冊をもとに、市民の皆様からさらに多くのエピソードや貴重な情報を寄せていただき、令和9年度には皆様と共に作り上げた「佐久の先人（三）」の発刊を予定しております。まずはこの広報別冊を通じて、子どもたちをはじめ多くの市民の皆様がふるさと佐久の歴史に触れ、このまちに生きる誇りと喜びをさらに深くされることを切に願っております。

令和8年10月 佐久市長

柳田 清二

新佐久市誕生20周年記念式典におきまして発表しました第四次佐久の先人15人の生涯と足跡を、市民の皆様幅広く知っていただくため、広報別冊を配布いたします。

私は、平成22年8月から始まりました佐久の先人検討委員会に監修者として参画してまいりましたが、第四次選定では佐久の先人検討委員会委員長・監修者として関わらせていただきました。

第四次では、近年までご健在であった方々、市民の皆様顔の見える、身近な先人を多く選定いたしました。

広報別冊では、23回に及ぶ佐久の先人検討委員会での審議を経て執筆しました原稿を紹介させていただきます。ただしこの原稿は、令和9年度に『佐久の先人（三）』を発刊するための「最初の原稿」です。皆様の元にあります先人の資料や写真、先人に関する思い出やエピソードなど、どんなに小さな情報でも構いませんので、ぜひ多くの声をお寄せください。皆様から寄せられました資料や情報をふまえ原稿を完成したいと考えております。よろしくお願いいたします。

令和8年10月

佐久の先人検討委員会 委員長・監修者

伊藤 純郎

■事業の目的

千曲川の流れとともに独自の伝統や文化を育んできた佐久の地。この長い歴史の中からは、世界の舞台で活躍した人、地域の発展に尽力した人など、多くの先人が輩出されてきました。本事業は、先人たちが遺した偉大な業績やふるさととのつながりを紹介し、後世に語り継ぐことで、市民の皆様が地元の新たな魅力を再発見し、郷土への深い愛着と誇りを育むことを目的としています。

平成 22 年度に始まった本事業は、これまで第一次から第三次において 53 人の先人を紹介してまいりました。新佐久市誕生 20 周年という大きな節目を記念し、令和 7 年 3 月 9 日に開催された記念式典において新たな 15 人を「第四次の先人」として選定いたしました。本紙は、市民の皆様から広く情報やご意見を寄せていただき、それを踏まえて原稿をさらに充実させるため、第四次の先人たちの原稿をご紹介しますものです。

「佐久の先人」(第四次 選定)

伴野（友野）友彦	・ ・ ・ ・ ・ P 4
小林 文素	・ ・ ・ ・ ・ P 6
木内 芳軒	・ ・ ・ ・ ・ P 8
比田井 弾右衛門	・ ・ ・ ・ ・ P 10
北原 丈衛	・ ・ ・ ・ ・ P 12
市川 雄一郎	・ ・ ・ ・ ・ P 14
井出 幸吉	・ ・ ・ ・ ・ P 16
ガブリエル・ディアス	・ ・ ・ P 18
渡辺 静	・ ・ ・ ・ ・ P 20
佐々木 方子	・ ・ ・ ・ ・ P 22
もろさわ ようこ	・ ・ ・ ・ ・ P 24
原田 岸子	・ ・ ・ ・ ・ P 26
井出 孫六	・ ・ ・ ・ ・ P 28
山川 啓介	・ ・ ・ ・ ・ P 30
土屋 竜一	・ ・ ・ ・ ・ P 32

【お読みいただいた市民の皆様へ】

先人の紹介文作成にあたっては、なるべくエピソードや写真を踏まえ、読みやすさを考慮しております。文献・資料や寄せられた情報を基に、正確な記述となるよう心がけておりますが、万が一内容に事実誤認、問題等がございましたら、文化振興課までご連絡ください。

また、貴重なエピソード、当時の資料（写真や日記など）がございましたら、情報をお寄せください。皆様からいただいた大切な声を反映して原稿をさらに精査・修正し、令和 9 年度に「佐久の先人（三）」として発刊・販売する予定です。

佐久の先人たち(54)

庶民の教育に尽くした江戸後期の心学者

ともひこ
友彦
とも
伴野

(1747 ~ 1834)

入澤村の神官の家に生まれ、詩歌や書に優れていた。京都で石門心学を修めた後、郷里に成章舎を開き、佐久地域に心学を広めた。手習い師匠としても子女の教育や農民の指導育成に努め、門人や寺子は500人にも及んだ。

●大宮諏訪神社の手習い師匠

伴野（友野）友彦は、一七四七（延享4）年入澤村（現佐久市入澤）の神官の家に生まれた。通称は友彦、直治。佐渡守とも称した。伴野家が代々神官を務めた大宮諏訪神社は、一三七六（永和2）年の銘のある鰐口や一五八五（天正13）年以降の神道裁許状（神職の許可証）もあり、近隣の

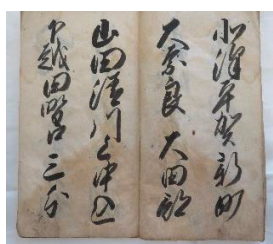


入澤の大宮諏訪神社

一〇社を束ねる村社である（『南佐久郡の古文書金石文』）。

村内屈指の有識者で詩歌や書に優れていた友彦は、神官の傍ら寺子屋の師匠でもあった。寺子屋の学習は文字の読み書きが中心で、手習いを通じて礼儀作法や日常生活に必要な知識を習得することを目的とした。

友彦は、南北佐久の二〇〇近い村名を七五調でリズムカルに詠みこんだ『佐久郡郷尽』を作った。『夫爰に信州佐久郡其村数を尋んと、ふみ出足八軽井沢』と始まって千曲川東岸の村々を南に進み、最上流の梓山（現南佐久郡川上村梓山）で折り返し、千曲川西岸に沿って「是二勝間よよろこびハ杵に餅搗臼田村声根も高く高柳の取出新町聞時ハ鍛冶屋二打や腰の物」と、布引（現小諸市大久保）や島川原（現東御市島川原）まで、繰り返し暗唱し、村名を順に書くことで地理も覚えられる、地域の暮らしに密着した教材である。



「佐久郡郷尽略帖」
村名を書き抜いた手本
（日向義正氏提供）

●心学の興隆と成章舎

京都の町人石田梅岩が一七二九（享保14）年に創始した心学は、神儒仏の三教を融合して孝忠・正直・侯約などの徳目を説いたが、商人の営利を肯定し

て女性の聴聞も拒まなかった。梅岩死後、高弟の手島堵庵は、精神修養に力点を置いて心学の布教と統制に専念。経書や道話を聴く講席と参集者が討論する会輔、心身を落ち着ける静座などを行う心学講舎を各地に建て、教化対象者に合う教材も作った。友彦も京都に出て堵庵門下で学んだ。



「目なし用心抄」手島堵庵 著
1794（寛政6）年の書写
（佐久穂町教育委員会提供）

信州に心学を広めたのは、埴科郡下戸倉村柏尾（現千曲市戸倉）の糸商人中村習輔で、一七八六（天明6）年、恭安舎を設立して教化活動をした。「恭安舎社友記式番帳」によれば信濃国の社友は三九六八人、そのうち佐久郡は七五か村八九七人、うち女性一〇四人（『更埴市史』）。なかには「入澤村伴佐渡守」と友彦の名もある。

一七九三（寛政5）年、佐久甲州街道宿場の高野町村（現南佐久郡佐久穂町高野町）の高見澤監物宅に成章舎が開かれた。「諸国舎」によれば信濃国では恭安舎、松代の匡直舎、須坂の教倫舎に次いで四番目である。高見澤家の婿でもある友彦が成章舎の都講（塾頭）を務めた。「成章舎出席着到表」には3月に二〇人、11月5日の舎号開きには三五人の名が記されている。このころ、佐久には江戸で

参前舎を開いた中沢道二や植松自謙も巡講に訪れていた。寛政年間に書写された心学の手本や心学の総本山明倫舎三世舎主の上河淇水（愿蔵）からの書簡も残されており、友彦が経験や人脈を生かして都講を務めていたことがうかがえる。

●入澤の道場と心学狂歌

やがて成章舎は入澤村に移った。一八〇四（文化元）年、友彦は、「成章舎」という舎号を授けられているが名ばかりなので、この度、五間三間の道場の建築を許して下されば、村の若者たちにも順を追って心学を教えたい」と、名主ら三名連署で、田野口藩役所へ道場新築を願い出た。翌年、新築祝として藩主の筆になる「大聖孔子像掛物」を田野口陣屋代官前島発多から下賜されている。道場に昼間は手習い子らが通い、夜は社友たちが集まって心学の学びを深めた。

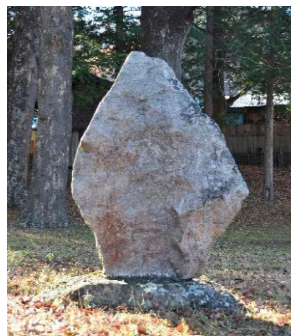
友彦は、身近なたとえを用いて平易なことで仁義道德を説いた。郷土史家岩井傳重が入澤を訪ねたとき、長田家には友彦書の酒の礼讃文や豆腐の徳を称える文が残されていた。三石家には「勸農固本録・地方心得帖」という冊子があり、農を勧めて根本を堅固にする要綱や村政の心得を友彦が具体的に説明していた。

友彦は、洒落やユーモアを含んだ短歌である心学狂歌でも本領を発揮し、心学の本質に迫る日常生活の実践道德を巧みに詠みこんで教化に役立て

た。「主へ忠親へ孝あるお手本に針に従ふ糸を見習へ（忠孝）」「苦しんで身を勤むれば腹の中はづかしからぬ心安楽（勤労）」「日に三度心の垢を洗ひなば遂には白き身とはなるべし（反省）」「心あれ使ふも人の思ひ子よ我思ひ子に思ひくらべて（同情）」「気は長く心は広く色うすく勤めはかたく身は下にあれ（処世）」などの遺作がある。

●管城塚と佐久地域の庶民教育

一八二七（文政10）年、友彦81歳のとき、門弟が諏訪神社境内に「管城塚」を建てた。管城とは中国の故事に基づく筆の別称で、筆塚は使い古した筆の供養のために筆を地に埋めて築いた塚だが、次第に筆を用いて教え導いてくれた師匠の徳を称え、謝恩と修学の記念に門人や寺子が建てる石碑のことになった。管城塚には、「龍騰鳳翔」と友彦の書が雄渾であったことや、農閑期には門人寺子が五〇〇人に及んだことが記されている。秋山村（現南佐久郡川上村秋山）出身で幕末の国学者、歌人の上田千風や三条（現佐久市入澤）名主で画家の日向休岳も門人だった。



管城塚
裏に碑文が刻まれている

友彦は、一八三四（天保5）年、88歳で天寿を全うした。友彦の子で父の跡を継いだ伴野豊彦もま

た多くの子弟を教え、一八八九（明治22）年、門弟らが太宮諏訪神社前の川沿いに「伴野翁筆塚」を建てた。

江戸後期から明治初期には、庶民の教育要求も高まり、佐久市域にもたくさんさんの寺子屋や私塾が開かれ、人々の信望が厚く実力のある師匠と門弟との師弟関係は生涯続いた。『佐久市志』には七六人、『望月町誌』には三二人の師匠の名があり、『日田町誌』には一五、『浅科村史』には二二の筆塚の記録がある。

よりよく生きるために教え学ぶという素朴な熱意のもと、勉学に励んだ先人たちの足跡が私たちの身近に今も残されている。友彦は、その象徴的な人物である。

（大工原千恵）

参考文献

長野県教育史刊行会編・発行『長野県教育史』第一・第七・第八巻、一九七二～一九七八年
岩井傳重『江戸時代東信濃宿村の歴史』江戸時代東信濃宿村の歴史刊行会、一九七五年
青沼の自然と歴史刊行会『青沼の自然と歴史』一九六五年

佐久の先人たち⑤⑤

人体模型である解体人形を作った農民

こばやし ぶんそ (ふみもと)
小林 文素

(1769 ~ 1826)

大奈良村に生まれた文素は、田野口陣屋に仕えて、江戸と往復しているうちに、解剖書の『解体新書』と出会い、その図に基づき、各臓器を模した極めて精巧な人体模型である解体人形を製作した。わが国に現存する唯一の貴重な解体人形である。

●大奈良村に生まれた小林文素

小林文素は、一七六九（明和6）年、佐久郡大奈良村（現佐久市田口）に、小林三ツ丞宣易の二男として生まれた。文素の兄の安右衛門易久が六代目として家を継いだ小林家は、七代目の作太夫が名主を務め、八代目の小太郎も寺子屋師匠のほか村役人を経験するなど、有力農民の家であった。

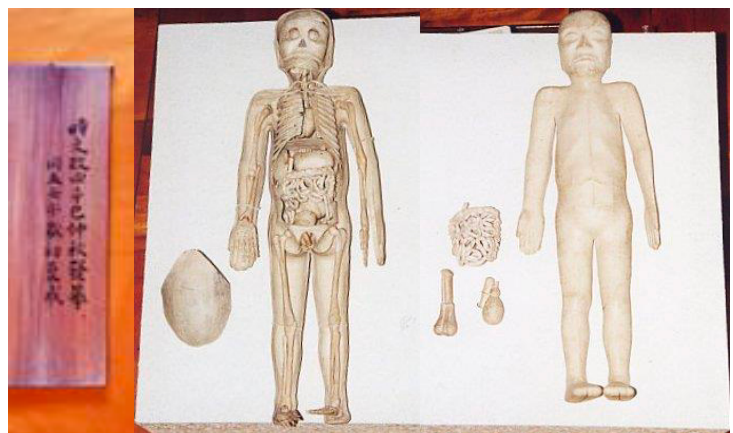
幼名を加蔵、通称準平、号を文素といい、母方の伯父の田野口村神原丁の小林文蔵茂嘉の養子となった。養家の家伝によれば、田野口陣屋の大御番頭を務め、陣屋の御用で江戸との往来をよ

くしそのおりに、江戸の文化に触れることも多かったとみられる。また、家伝によると寺子屋師匠もしていたという。

●解体人形を製作

文素は、一八二〇（文政3）年に陣屋の用で江戸に出かけ、『解体新書』という医学書に出会った。『解体新書』は、ドイツ人医師の解剖書のオランダ語版『ターフェル・アナトミア』を、江戸の医師杉田玄白らが、一七七四（安永3）年に日本語に翻訳して出版したものである。千住の小塚原刑場で、初めて屍体の解剖を観た杉田玄白らは、骨も臓器も『ターフェル・アナトミア』の図と寸分も違わなかったことに驚き感動、翻訳したという。従来の漢方医学書では知られていなかった人体内部の骨格や内臓、筋肉、神経などを精密な図で紹介しており、それに似た感動が文素をしてこの解体人形を作らせたのだろう。箱書によると一八二二（文政4）年から翌年にかけて、『解体新書』の図を参考に解体人形を製作した。

解体人形は、身長五五cmほどで、和紙と桐材と針金をはりあわせ、臓器を精密に製作し、取り外してその構造を研究できるようにしてある。「腹部に胃と脾臓と脾臓が一括して入っている。漢方では胃と脾臓は体の消化をつかさどるものとして一括にとらえているが、実際は胃と脾臓が消化器官、脾臓は造血器官として別物なので、文素は漢方の知



佐久市有形文化財に指定されている解体人形箱書（左）に「時文政四年辛巳仲秋癸摸、同五壬午歲初夏成」とある

識にもとづいて西洋医学の知識を加えてこれをつくっていると考えられる」とされる『酒井シヅ』解体人形の精巧な内部にせまる」平成17年度『臼田町誌年次報告』。

単体で製作された解体人形は、生殖器を交換することで男女の解剖学構造を併せて示し、さらに女性の腹部には誕生寸前の胎児までが精巧に再現されていた。

江戸時代の男性の平均身長が一五〇cmほどといわれるので、その三分の一の精密な人体模型である。

四角い顔は、江戸時代の庶民の典型的な顔立ちである（鈴木尚『日本人の骨』岩波書店、一九六三年）。

●松本城下でもう一体作る

文素は、解体人形を携えて、一八二五（文政8）年6月に松本城下へ出かけた。芦田宿、武石村、鹿教湯を通り、峠を越えて、松本近郊の岡田宿に出て、浅間温泉やその周辺にしばらく滞在したその旅の記録が、表紙に『文政八酉年六月吉日 覚之記』、裏表に「信州佐久郡田野口村神原丁 小林文素用」と書かれた『覚之記』である。



松本への旅の記録
『覚之記』

7月11日に、松本城下の本町二丁目にあった高見屋甚左衛門という書店を訪ね、さらに本町五丁目の松屋蓬瀛堂という医学の器具を扱っている家で泊まった。

松屋蓬瀛堂に滞在中、持参した解体人形を人々に見せたところ、評判になり、松本藩医の小松齢司と子息の小松左右輔の目にとまり、松本でもう一体製作することになった。左右輔は参考書として、所蔵の『医範提綱』（宇田川榛斎訳述、一八〇五年

刊）、『解臚図賦』（越前池田冬蔵著、一八二二年刊）、『解屍編』（古河藩医河口信任著、一七七二年刊）の三部の解剖書を貸してくれた。

文素は、これらの解剖書の図を参考に、約二か月かけて解体人形を完成させた。『覚之記』にこの人形を仕立てた記録を、「私は以前杉田玄白先生の著の『解体新書』を見て、その形を一体の人形に摸製して、松本に携て来たところ、松本藩医の小松左右輔氏の目にとまりました。小松氏は和蘭の実証的な学問である蘭学に詳しく、前に作った人形の誤りを指摘してくれました。そして蓬瀛堂の主人ももう一体松本に残してくださいと言ったので、松本に滞在して、二か月かけて完成しました」と書いている。その後もしばらく松本に滞在していたが、10月20日に、村から迎えがやってきたので、一緒に大奈良へもどった。松本に残されたはずの解体人形の行方は不明である。

文素は、一八二六（文政9）年11月20日に没した。享年58。戒名は空医真文素信士といい、人体内部の医の真実を求めた文素の生涯を物語っている。

●解体人形の意義

人骨だけの模型は、広島町の医師星野良悦が一七九二（寛政3）年に作らせた星野木骨（広島大学医学部医学資料館蔵）を始め、数体が残されているが、これらは臓器が作られているわけではない。また、より精密な紙製の解剖模型は、フランスの

オゾーという学者が一八二五年に製作し、人体各部の名称を記した「キュンストレーキ（人工死体）」として、幕末から明治にかけて日本へも数体輸入され、解剖教育に利用された。

文素が作成した解体人形の用途については、オゾーのキュンストレーキのように人体各部の説明が書いてあるのではないので、解剖における人体内部の説明に使われたのではないだろう。

解剖の教材用に作られたわけではないのだが、オゾーと同時期の一八二二年に製作したこの解体人形は、わが国に現存する唯一の貴重なものとして意義深い。また、一八二〇年代には、信州の農民にも解剖学の正確な知識が『解体新書』などとして伝わり、人体内部を実証的に見る目が生まれていたことも知ることができる。

（青木歳幸）

参考文献

臼田町誌編纂委員会『臼田町誌』第四巻 近世編 佐久市臼田町誌刊行会、二〇〇八年

佐久の先人たち⑤6

塾を開き多くの門弟を育てた漢詩人

きうち ほうけん
木内 芳軒

(1827 ~ 1872)

江戸で梁川星巖や佐藤一斎ら著名な師に学び、帰郷後は塾を開いて依田稊堂ら維新後に活躍する500人余の門弟を育てた。佐久間象山と親交があり、若き日の渋沢栄一も芳軒を漢詩の師として慕い交際していた。

●江戸で学び郷里で塾を開く

木内芳軒は、一八二七（文政10）年、下県村（現佐久市伴野）の豪農で名主を務める木内善兵衛家に生まれた。名は政元、通称源五郎、字は子陽、芳軒は雅号である。

幼いころから絵を好み、小県の絵師武重桃堂の教えを受けた後、江戸に出て喜多武清に南画を学んだ。また兄惺堂とともに、尊皇論者として知られた漢詩人梁川星巖に師事、佐藤一斎に朱子学・陽明学を、菊池五山や大沼枕山に漢詩を学んだ。枕山とともに明治の三詩人と称された小野湖山や鈴木

松塘は親しい友であった。松塘は芳軒の人柄について「生まれつき親孝行で年長によく仕える」と村々に知られ、人々とは必ず真心で接する」と書き残している。



芳軒が書いた絵馬（縣神社所蔵）
古今和歌集から源宗子の和歌と肖像

さらに芳軒の漢詩について「その詩は神清で、ひびきが秀でている。詩の題を得ると、いつでも文の構想が湧き出る。詩作に励む者もこれから志す者も見習うべきだ」と記している（『芳軒居士遺稿』）。

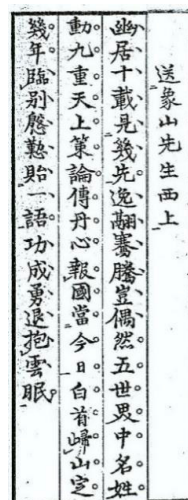
先に郷里に帰って私塾を開いていた兄惺堂が一八五四（安政元）年に早世したため、芳軒は帰郷してその塾を継ぐことになった。そして一八七二（明治5）年、45歳で亡くなるまでの間に、南・北佐久にわたって五〇〇人余の弟子を育てた。

●佐久間象山と交流

芳軒は江戸遊学中に佐藤一斎のもとで16歳年長の佐久間象山と知り合い、兄惺堂とともに親しく交流していた。一八五四（安政元）年、象山は吉田松陰がアメリカ密航を企てた事件に連座して松代に幽閉されたが、そのときの嘆きと憤りを漢詩にして芳軒に贈っている。

一〇年後象山は一橋慶喜に召喚されて京に上り、

宮中や将軍家に政策論を伝えることになったが、芳軒は見送って送別の漢詩を贈っている。



芳軒の漢詩
京に上る象山を見送って詠んだ

（意訳）「幽居一〇年があつたからこそ、宮中に政策論を伝える機会を得た。真心で国に仕えた後は故郷に帰り、俗世を離れてゆっくり過ごしてほしい」

また、善兵衛家が象山を金銭的に支援したことが分かる資料も残されている（信濃教育会『象山全集』下巻、一九二三年）。

●渋沢栄一に漢詩を教える

13歳年下の渋沢栄一との出会いは、栄一の父市郎右衛門が14歳（数え年・以下同じ）の栄一を同行し、旧知であった芳軒に教育を依頼したことが始まりだという。のちに栄一は新聞の取材にゆえに「私が十四五歳の頃父の荷背負をして佐久小県へ一年四位参りたり、十九歳よりは父に離れて藍屋商売を独立で営み、二十二歳の時迄、前後七年間当地へは繁々と来れる…更に南佐久郡下県に木内芳軒という人あり、詩文を能くせし為そのころ深く交際したり」と語っている（大正6年5月15日付『信濃毎日新聞』）。

栄一の従兄で義兄にあたる尾高惇忠（富岡製糸初代場長）は、芳軒の子の四郎に宛てた手紙に「その昔、自分は栄一と共に商いで信州に行くと、必ず君の家を訪ね、父上（芳軒）や若き君子らと交わり、談はいつも夜明けまで続いた」と書き残している。また、芳軒が不在の折には、栄一が代わって講義したり、剣術の指南をしたこともあったという（昭和16年10月28日付『中信毎日新聞』）。

芳軒が栄一を迎えて詠んだ漢詩が残されている。

十七夜青淵澁澤君見訪席上同賦用上元韻
美人影落竹門東。剥啄聲傳砌戶中。燈火三年曾役
夢。詞鋒一夜五爭雄。外松幽賞山懸月。看劍高談座
生風。抵合沈酣永今夕。任他烏兔太匆匆。

（通釈）「才徳ある友の姿が竹門の東に見え、戸をたたく音が離れた部屋に伝わって来る。灯火の下で三年夢を求め、詩文の鋭い議論の夜には互いに雄を争う。酒を飲みながら山に懸かる月を愛で、剣術に見入り、声高に談ずる座は風を生む。まさにこの夕を深く永く楽しむべし。ままよ歳月は瞬間に早く行き過ぎる」

●尾高長七郎をかくまう

惇忠の弟の長七郎は一八六二（文久二）年、老中安藤信正が坂下門外で襲撃される事件に係わって追われる身となったが、芳軒は栄一と惇忠の依頼を

受けて長七郎を二か月間かくまい、その後無事に京へ逃がした。

このころ栄一や惇忠らは、横浜の洋館を焼き討ちして攘夷（じやうい）を実行しようと計画していたが、京から戻った長七郎の説得で思いとどまった。栄一は、後に「もしその時に実行したことなら、自分たちの首は二十三、四年前に飛んでしまったであろう」と語っている（『雨夜譚』）。

芳軒は間接的に栄一らの命を救ったことになる。

●芳軒の弟子たち

弟子の依田稼堂（喜信）は、芳軒に学んだ後に鈴木松塘の教えを受け、帰郷後「有隣塾」を開いて野沢、岩村田、桜井、前山で二〇〇余人余に漢詩文を教えた。畠山春雲（正容）も下県に塾を開いて、二〇〇余人余の弟子を育てた。



栄一（青淵）が芳軒に贈った書
為書きに木内詞兄とあり、漢詩の先達として芳軒を慕っていたことが分かる（木内拓郎氏所蔵）

一九〇一（明治34）年に上田中学校野沢分校（現野沢北高校）が開校するまでの間、佐久の中等教育を担ったのが芳軒の弟子たちだった。

鈴木頑石（正光）は、芳軒に学んだ後に貞祥寺の師席となり、曹洞宗本山の宿老席に列して多くの僧を育てた。後に「現代書道の父」と言われる比田井天来に、書家になるよう勧めたのは頑石だった。

また、廃仏毀釈に反対し、取り壊されそうになった松原村（現南佐久郡小海町豊里）神光寺の三重塔を貞祥寺に移築して守った。

●栄一の漢詩「内山峡」の碑

一九四〇（昭和15）年、芳軒ゆかりの人々が呼びかけ、三石勝五郎ら佐久出身の多くの文化人の賛同と、栄一の孫敬三の全面的支援を得て、栄一の漢詩「内山峡」の詩碑が内山の舂水（いばみず）に建立された。「内山峡」は、上州から内山峠を経たときに目にした風景を詠んだもので、栄一の思想「論語と算盤」の原点ともいえる一節がある。詩のなかの言葉「青天を衝け」はNHK大河ドラマのタイトルとなった。

碑の文字を書いた芳軒の妹の孫木内敬篤は、建立の趣旨について「栄一の遺訓を後世に伝え、あらゆる階級・職業・部門を連結した真の地方文化を佐久に確立するための指標とする」と書き残している（木内敬篤『渋沢青淵先生旧詩内山峡』）。

この碑の建立に関わった人々の思いを受け継ぐとともに、芳軒の遺徳も後の世に伝えていきたい。

（木内清）

参考文献

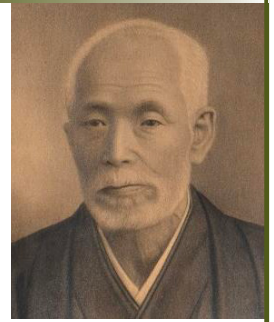
鈴木松塘編『芳軒居士遺稿』一八七八年
岸野村誌編纂委員会『岸野村誌』一九八七年

佐久の先人たち⑤7

広域の行政に尽力した
初代協和村村長

ひだい だんえもん
比田井 弾右衛門

(1840 ~ 1915)



江戸から明治において、名主、戸長、村長を歴任し、また、郡会議員や県会議員も務めた。国有化された広大な山林を元の村有林に戻し、また、学校や伝染病舎の建設を行うなど、村の財政や村民の生活を支え、幅広く活躍した。

●名主の家に生まれる

比田井弾右衛門は、一八四〇(天保11)年11月27日、佐久郡天神林村(現佐久市協和)の名主、比田井弾右衛門義久の二男として生まれた。幼名は丹平。強い意志をもち、冷静で感情を表に出さない性格であったという。姉のことは、片倉村名主の比田井家に嫁ぎ、後に日本現代書道の父と称される比田井天来(てんらい)の母となる。

一八六二(文久2)年2月、21歳のときに桑山村(現佐久市桑山)の里(し)よを妻に迎え、閏(うる)8月に相続(くわく)このとき弾右衛門を襲(しゅう)名し、名主を継承したとみ

られる。

●要職を歴任

一八七三(明治6)年7月、隔番(かくばん)の名主から副戸長に就任、明治9年、天神林村など七か村が合併して協和村が誕生すると副戸長、そして明治12年6月には、協和村戸長に就任した。明治17年に布施村戸長、翌年には春日村戸長も兼任する連合戸長に任命された。明治22年4月、北佐久郡徴兵参事と協和村会議員に選ばれ、5月には協和村戸長から初代村長に就任。明治38年5月に退任するまで一六年間村長を務めた。

明治24年には北佐久郡会議員に当選、郡参事会議員も兼任、さらに明治25・26年には、長野県会議員に当選して明治30年まで務めるなど、各種の要職を歴任した。

●官有地化された山林原野を村有地化に尽力

弾右衛門が長年力を注いだのは、山林行政であった。蓼科山の標高二〇〇〇m付近のトキンの岩から見渡す広大な山林原野は、江戸時代から村ごとに入会地(いりあいち)(共同利用地)が定められ、家畜(まけ)の秣(もく)や薪、炭の用木などが採取され、人々の生活を支える大



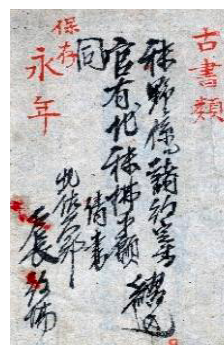
トキンの岩から望む山林原野

切な場所であった。

明治6年7月、政府は地租改正に着手し、所有者が定まっていらない入会地を官(かん)有地(ゆうち)に編入した。この結果、入会権が認められなくなり、人々の生活は困窮し、地域経済の停滞が懸念され全国各地で地租改正反対一揆が激化した。

弾右衛門

は、明治13年ごろから協和村や近隣の要望に応じ



『疎野に係る諸約定書』
官有地秣払下願同請書綴込
北佐久郡戸長役場

て、長野県に官有地の下げ戻し(返還)を繰り返し請願したが実らなかった。明治31年には、協和村片倉区入会地の編入が不当であるとして、長野県知事を相手に行政裁判を起こしたが、村が官有地として届け出ていたことが根拠となり、敗訴した(明治32年3月18日付『官報』第四七二二号)。

明治32年4月、「国有土地森林原野下戻法」が公布され、国有化された山林や原野を元の所有者や相続人に返還することが可能になった。協和村では、明治34年に二二〇〇余町歩の官有地を下げ戻す議案が可決されたが、トキンの岩付近の赤谷地籍の三〇〇余町歩は、村里から離れ急峻な地であることから却下された。弾右衛門は、村民の将来のために個人で下げ戻しを申請し所有した。この山林原野は、弾右衛門と相続した長男盛太(後の協和

村第五代村長が、すべて村に寄付をした。これにより東京ドーム五五〇個分に相当する二六〇余町歩が村有林となった。現在は、協和財産区と各自治会の所有林として維持管理し利用されている。

●教育に懸ける思い

一八七二（明治5）年に学制が公布され、翌明治6年に寺子屋から弘道学校、習新学校、成章学校比田井支校の三校が新たに小学校として誕生した。三校は、明治8年に統合されて至善学校、明治13年に協和学校となった。弾右衛門は、県令（明治19年に知事）から教育に関する政策や学校の運営を行う協和学校学務委員に選任され、布施村の布施学校学務委員も兼任した。

明治21年4月、協和学校は協和尋常小学校となった。このときの教育費は村の予算のほぼ半分にあたる五四〇円であったが、学齢児童約四〇〇人に對し就学児童は半数であったため、多くの生徒が入学することを願い、学校教育の奨励に力を入れた。明治25年、弾右衛門は、本牧村ほか六か村組合川西高等小学校組合長に選任され、明治30年からは本牧村ほか二か村の組合長を務めた。この間、就学児童が増加したため、校舎の増築を提案したが、時期尚早で工費の使途が偏っているなど多くの意見が入り乱れた。そこで、弾右衛門は明治34年、村議会に六三四〇円の建築費に各区や個人への寄付と出資金を充てる追加議案を提出し、明治35年に

二階建ての増築校舎が落成した。翌年に高等科が併設され、協和尋常高等小学校となった。

その後、児童数がさらに増加したため、大正3年末に新校舎を建設したが、三年後の2月28日に職員室から出火し、中央校舎や南校舎が全焼した。再建の新校舎は、大正7・8年に建設された。

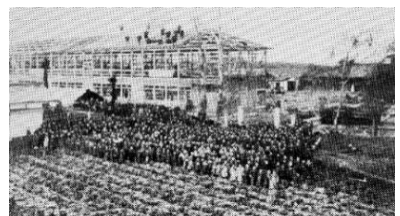
●伝染病の防疫対策

佐久郡では、江戸時代から天然痘が流行し、明治になると赤痢やコレラも広まった。明治23・25・29年にも天然痘が流行し、患者の半数が命を落とす深刻な事態が続いた。

こうした状況のなか、協和村は明治28年に「協和村清潔法施設順序」を定め、伝染病患者を隔離する避病院の設置を決めた。明治30・31年に結核や赤痢が確認されたため、明治32年12月に八丁地川治いの上大行原に「協和村隔離病舎」が建設された。

明治34年7月5日付『佐久新報』は、「北佐久郡下で隔離病舎が最も整備されているのは、小諸と岩村田の仮伝染病院。次いで協和村・本牧村など七か村の病舎がきちんと維持されている」と報じている。

●弾右衛門の功労



焼失前の協和尋常高等小学校棟上式

名主から村長までの四二年間、地域づくりや人々の生活の向上に尽力した弾右衛門に対し、村長退任後、村民から金牌、村からは、林業功労者として感謝状が贈られた。明治38年には、長野県から教育向上の功績により金牌が授与され、翌年には、国から社会発展に寄与した人に贈られる勲七等青色桐葉章が授与された。

一九一五（大正4）年10月、弾右衛門は74歳で亡くなった。死去から五〇年後の一九六五（昭和40）年11月、協和財産区と協和地区有志は、翁の遺徳を慕って、広大な山林原野が望めるトキンの岩に「比田井弾右衛門翁之碑」を建立した。

強い信念で村や人々のために行動

する弾右衛門に対する、地域住民の尊敬の念が記されている。



比田井弾右衛門翁之碑

参考文献
（福島邦男）

『秣野に係る諸約定書 官有地秣野下願同讀書綴込 北佐久郡戸長役場』一八八〇年～一九〇一年

木内政太郎『佐久名流評林』佐久名流評林著作部、一九〇九年

一〇〇年誌編集委員会編・発行『協和小教育一〇〇年誌』一九七八年

佐久の先人たち⑤8

南佐久郡立農学校を
廃校の危機から救った校長

きたはら じょうえ
北原 丈衛

(1880 ~ 1968)



生徒不足で廃校の危機にあった南佐久郡立農学校に校長として赴任する。「率先垂範」を教育の基本理念に掲げ、学校を再建し、文部省から全国の実業学校のなかで優良校として表彰される。

●廃校問題と北原文衛校長の着任

南佐久郡立乙種農学校（後の臼田高校、現佐久平総合技術高校臼田キャンパス）は、郡民の実業教育に対する期待が高まるなか、一九〇七（明治40）年に修業年限三年の学校として開校した。

しかし、開校まもなく廃校問題が起きた。小学校の高等科に進む者さえ少なかった時代で、「百姓に学問はいらない、農学校は金持ちの長男が行くところだ」という考えがまだまだ根深く、定員四〇人に対し入学希望者は二〇人にも満たなかったからである。さらに、中途退学者が毎年のように何

人か出る状況であった。

学校の運営費は、郡の総予算額の三分の一以上に達しており、予算郡会では、「生徒の集まらない学校に多額の金をつぎ込むことはない。将来見込みのない息子（学校）は勘当（かんどう）（廃校）してしまえ」と毎年のように廃校問題が持ち上がっていた。

南佐久郡長安藤兎毛喜は、学校経営がうまくいかないのは、校長に人を得なかったのが最大の原因であると考え、「校長に適任者をもってくれば必ずこの学校は建てなおすことができる」という信念と、「生まれたものは育てなくてはならない」という責任感から、廃校案の猶予（ゆうよ）を求めた。

安藤の胸中にあつた適任者とは、北原文衛（きたはら じょうえ）であった。北原は、一八八〇（明治13）年6月4日、上伊那郡長藤村（現伊那市高遠町）の生まれである。

一九〇四（明治37）年、長野県師範学校（現信州大学教育学部）を卒業。さらに、一九〇七年、東京帝国大学農科大学農業教員養成所を卒業。静岡県田方郡立田方農林学校（現静岡県立田方農業高校）に就職し、一九二二（明治45）年に、伊那実科高等女学校（現伊那弥生ヶ丘高校）に赴任した。

上伊那郡長在任中、早朝の散歩を日課としていた安藤が、女学校の前を通つてふと目にとめたのは、校庭の片隅で黙々と鋤（くわ）をふるっている作業着姿の一人の男であった。それが北原であった。それから二人は時々話をするようになり、北原は並の人物では

ない、意志強固な人であり、そのうえ見識も高いことを、安藤は知ることとなった。

その後、二人は転勤などで相語る機会はなかった。安藤は、一九一四（大正3）年から上水内郡組合立東部農学校（現長野吉田高校）に勤務していた北原を訪ね、学校の窮状を訴え、校長としての来任を懇請したが、断られてしまった。しかし、安藤はあきらめず、次の年も、郡会の廃校案の猶予を乞い、北原の説得に懸命の努力を続けた。安藤のこの二年間にわたる熱意が、北原の心を動かし、ついに一九一六年12月、校長として迎えることができた。北原の年齢は36歳であった。

以後、一九四六（昭和21）年3月に職を退くまで合計二九年四か月、校長職にあつた。学校は、一九二二（明治44）年12月に南佐久郡立農学校と改称し、一九二〇（大正9）年には長野県南佐久農学校となり、一九三三年には郡制の廃止に伴い、郡立から臼田町ほか一六か町村の組合立に変わり、校名も同年、長野県南佐久農蚕学校と改められた。

●「率先垂範」の教育

北原の学校経営は、人の先に立って物事を行う



農学校創立以前に建立され、全面改築まで偉容を誇った本館

「率先垂範」を教育の根本理念としていた。水田肥料に青草を入れるため、田植え前の白田山での草刈り作業では自ら先頭に立ち、さらに、井戸掘り、石垣積み、学校の周囲にある樹木の剪定など自分で行った。この結果、北原が赴任してから学校の農場収入が飛躍的に上昇した。

一方で、学校の経費削減のためにも、校長自ら陣頭に立って奮闘した。養蚕・水田・蔬菜・畜産などの農場収入を高めてそれを蓄積し、経費を節減して浮かせ、それらをもとに講堂、養蚕室、加工室などを逐次自力で建設し、学校の施設・設備を充実させていった。

北原の学校経営の主眼は、県立ではなく、組合立の学校であるがゆえに成しえた、農場収入などによる学校自体の独立採算制の確立などであったことがうかがえる。

また、国語、数学の授業時間数を多くとるようにして普通教育にも力を注ぎ、幅広い人間形成にも努めた。

北原のこうした教育実践は、文部省にも認められ、一九三〇（昭和5）年、学校は、優良校として表彰されることとなった。

●地域貢献

北原は、専門の分野である農業について、幅広くしかも深い知識をもち、持ち前の実践力で、他の追随を許さぬほどのものをもっていた。その技術の

裏付けは単なる勘に頼るといえるものではなく、あくまで科学的な根拠に立脚したものであった。特に稲作については造詣が深く、「高冷地における稲作」の権威であった。そのため講演会の講師を依頼されることも少なくなかった。

●校長退職後の北原

一九五二（昭和27）年、白田町教育委員長に就任し、一期務め、一九六八（昭和43）年1月27日、87歳の生涯を閉じる。

一九八一（昭和56）年、同窓生有志による呼びかけで、北原の功績をたたえその人徳を後世に伝えるため、「恩師北原文衛先生を偲ぶ会」がつくられ、募金活動が行われた。当初の目標である賛同者

一〇〇〇人、募金額三五〇万円を大幅に上回り、賛同者一四〇〇人、募金額九〇〇万円に達した。これにより、頌徳碑の建立と記念誌の発行等が行われた。

頌徳碑裏面に刻まれた碑文には、以下の内容等が記されている。

大正五年、郡長、郡会に強く請われて当時多難



恩師北原文衛先生 頌徳碑

の南佐久郡立農学校の校長に着任し、若き情熱をもって、創意独自の教育理念を断固押し通したと。

農場より野良着のまま教壇に立ち、実践指導し、進んで農業を科学的にとらえ、普通教育にも力を注ぎ幅広い人間形成につとめたこと。

教え子は四千余を数え、佐久はもとより全国に活躍、海外にも雄飛していること。



昭和五年、全国実業学校中の模範校として文部省より選奨され、白田高等学校の基礎を固めたこと。

こうした北原の功績の源泉は、何事に対しても自らが先頭に立って行動する「率先垂範」の精神であった。

参考文献

恩師北原文衛先生を偲ぶ会記念誌編集委員会編・発行『恩師北原文衛先生』一九八一年
長野県白田高等学校百年誌編集委員会編・発行『白田百年誌』二〇〇七年

（田澤直人）

佐久の先人たち⑤9

郷土史研究に力を尽くした
教育者

いちかわ ゆういちろう
市川 雄一郎

(1891 ~ 1950)



長野県師範学校を卒業し、中込尋常高等小学校訓導に赴任する。桜井尋常高等小学校を始め、退職まで佐久地域の校長を歴任した。教職のかたわらで郷土史の研究を進め、『役筆筍から見た下小田切村』などの著書を遺した。

●三〇数年の教員生活
市川雄一郎は、一八九一（明治24）年中瀬村（現佐久市中込）石神で父甚作・母きしの長男として生まれた。明治42年野沢中学校（現野沢北高校）を卒業、長野県師範学校（現信州大学教育学部）で学び、翌年母校である中込尋常高等小学校訓導（正規の教員）として赴任した。その後岸野と平



中込尋常高等小学校（旧中込学校）

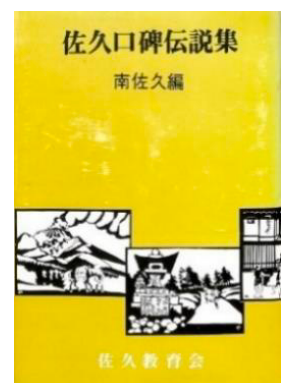
賀の尋常高等小学校訓導を経て、一九二四（大正13）年32歳で桜井尋常高等小学校の校長となった。一九四一（昭和16）年平賀尋常高等小学校長を最後に退職し、その後は小諸商業学校（後の小諸商業高校、現小諸義塾高等学校）などで勤務した。

●郷土史研究での活躍

桜井尋常高等小学校長となった翌年、南佐久教育会で郷土調査委員に委嘱され、続いて考古調査委員や郷土史編纂委員、口碑伝説調査研究委員等を歴任、さらに信濃教育会から委嘱され「小学校に於ける郷土教育の実地的研究」調査委員を務めた。それらの成果は『南佐久郡の考古学的調査』、『南佐久郡古城址調査』、『南佐久郡古文書金石文』、『南佐久郡口碑伝説集』などとして出版された。

この時期、県内各地で郷土研究が盛んになり、その中心を担ったのは、学校の教員たちだった。南佐久教育会では民俗学者柳田国男が昭和4年春季総会で講演し、その指導で方言採集を始めた。北佐久教育会では翌5年柳田を招いて指導を受け、口碑伝説を採集した。南佐久教育会もそれに続き収集が行われ伝説集が出された。

また、郷土教育の指導案作成のために、地理学者三沢勝衛などを招いて臼田町下小田切（現佐久市下小田切）をモデルに実地調査を進めた。雄一郎はその一員として参加し、昭和10年に江戸時代の村役人が残した史料から村の姿を再現した『役筆筍



佐久口碑伝説集
南佐久編（『南佐久郡口碑伝説集』改題・昭和53年）
佐久教育会

から見た下小田切村』を刊行した。昭和5、6年ごろから雄一郎が教えを受けていた、現地へ足を運んで体感して研究を進める「わらじ史学」で長野県の歴史研究の基礎を築いた代表的人物である栗岩英治は、序文に自分が理論的に村を捉えている段階なのに、『村』の具体的研究を、一つの実例によって「まとめ、日本に於て『村』といふものについて、其核心的研究を試みた最初の述作である」と同書を高く評価している。

このほかに、信濃教育会『信濃教育』や信濃郷土研究会（現信濃史学会）『信濃』などに論文を発表した。『南佐久郡の板碑』（『信濃教育』五四〇号、昭和6年10月）『津出しに就いて』（『信濃』第一次第三巻八号、昭和9年8月）など数多くの研究を残した。

●惜しまれた死

一九一六（大正7）年に妻美代と結婚し、三男一女に恵まれたが、昭和18年に二男常亮（18歳）、22年に長女とみ子（20歳）、さらに24年長男泰正（30歳）を亡くし失意のなか、本人も病により、25年

6月に59歳で亡くなった。

雄一郎の遺した土屋種作宛の



平賀村土屋種作宛の雄一郎の葉書

葉書によると、「胃腸不調となり一室内に閑居生活」を送っている状況だった。そんななかでも「郷土史として墓標の根本的調査」をしたいとの意欲を示していたが、かなうことはなかった。

一志茂樹が会長である信濃郷土研究会では、没後3か月という異例の速さで、『信濃』（第一巻第九号、昭和25年9月）を追悼号とし、未完の論稿「江戸時代に於ける農民生活」や学習院大学の児玉幸多ら二三名の追悼文を掲載した。

児玉は、「郷土史家に陥りがちな独断や論理の飛躍がない。そういう研究態度が、素人を喜ばせ、驚かせることが少なく、市川氏をして、郷里の人に理解されないという嘆きを感じさせたのでは」と記しており、お国自慢に陥りがちな風潮には与しなかったことがわかる。

一志は、「信州郷土史界から市川雄一郎君を失ふ」と題しその死を悼んだ。そこで精力的な史料収集と科学的に分析する姿を称賛した。

また、平賀小の教え子水間大吉は、訓導時代の雄一郎について、教材研究を徹底して行い、授業に臨むとともに、子どもたちに対して厳格な指導を行い、そのことで「一般的には受けのあまりよくない

い先生」だったが、「行き過ぎた自由にたいして学問的な真理を身を以て示す」姿勢だったと回想した。

さらに実弟の浅川益二郎は、煙草を吸わない雄一郎が毎月一円ずつ貯金をし、母親を関西や松島へ連れて旅行をしたことや、無類の麺好きで家に来たときは、麺ばかり五杯もお代りをしたこと、俳句を作っていたことを紹介し、桜井小での職員旅行で山陰に行ったときに、「心忙し旅の門出や夏の風」から始まる一四〇の句を詠んだこと、亡くなる前の昭和25年3月には、「子等に召され黄泉路の旅も憂なし」、「黄泉路行き待ちる身には春寒し」などの早世した子どもたちを思う俳句を残していたエピソードも紹介している。

同時期に遺稿となった「江戸時代農家の人的変化」が『歴史学研究』（二五一号、昭和25年9月）に掲載された。

●見直された業績

かつて多くの教科書に、一六四九（慶安2）年に幕府が農民に与えていたとされる触書（慶安の触書）が掲載されていた。しかし甲斐（現山梨県）や信濃にかけて出された地域的教諭書を元として、一六九七（元禄10）年徳川綱豊（後の六代将軍家宣）の甲府領（佐久にも領地があった）で発令された「百姓身持之覚書」が本来の姿であり、その後一九世紀半ばに美濃国（現岐阜県）岩村藩から「慶安の触書」

として出版され全国に広められたとする説が山本英二によって提唱された（『慶安の触書は出されたか』平成14年）。



勸農御触書資料
（『佐久地方江戸時代の農民生活』所収）

山本がこの説の根拠とした史料の一つに雄一郎が収集した甲府領だった村の一つである牧布施村（現佐久市布施）の一六六五（寛文5）年「勸農御触書」がある。この史料は山本が調査に行ったときにはすでに廃棄されていたというので、雄一郎の業績が改めて見直されることとなった。

参考文献

市川雄一郎『佐久地方江戸時代の農民生活』市川雄一郎先生遺稿刊行会、一九五五年
佐久市志編纂委員会編『佐久市志歴史編（四）近代』佐久市志刊行会、一九九六年

（市川包雄）

佐久の先人たち⑥

広域水道建設に尽力した
佐久水道の父

い で ゆきよし
井出 幸吉

(1891 ~ 1965)



南佐久郡畑八村に生まれる。集団赤痢が流行し上水道の普及が急がれるなか、わが国の農村地方広域水道の先駆けとなった佐久平上水道組合の初代管理者として尽力した。野沢保健所長の瀬下良一郎とともに「佐久水道の父」と称えられる。

一九三四（昭和9）年に畑八村会議長、昭和11年には45歳で畑八村村長に就任した。昭和15年に村長職を辞したが、昭和27年に再就任し村政を率いた。

●集団赤痢の流行

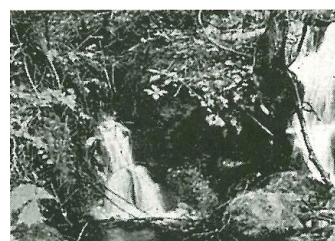
昭和20年代後半、佐久地方では、不衛生な井戸水を原因とする集団赤痢が猛威を振るった。野沢保健所長の瀬下良一郎（野沢町三塚）は、「佐久に水道を」と呼びかけ、国に陳情し町村長の理解を得ようと東奔西走した。一九五四（昭和29）年初めに、保健所内に佐久平上水道組合設立準備会の発足までにこぎつけたものの、事故の療養のため一線を退くことになった。

瀬下という心柱を失った準備会には、水源確保と資金調達の大難題が待ち受けていた。この難局に立ち向かったのが、四二〇人余りの村の幸吉であった。

●激動の昭和29年

臼田町、野沢町、中込町、畑八村など南佐久郡下一〇か町村で発足した準備会は、水源を求めて群馬県境から八ヶ岳山頂まで踏査の末に、八ヶ岳山麓の栄村域の国有林内を候補地としたが同意が得られなかった。こうした窮状のなか、隣村の幸吉は、「畑八村地籍で引き受けましよう」と、大石水源と千ヶ日向水源の無償提供を申し出た。息つく間もない果敢な決断、準備会発足から半年後のことで

あった。この無償提供について幸吉は後年、「不満に思う村民と漁業組合への配慮」について述べていたという。



着工前の大石水源湧水
(佐久水道企業団五十年史)

水源確保の見通しは立ったものの、管理者を誰にするか組合事務所をどこに置かなど利害と思惑が錯綜し、準備会内は紛糾した。明治以来の中心地だという自負、人口で優位な立場など臼田町、野沢町と中込町には譲れない実情があった。この窮地に調停役となった水道設計者の佐藤善之助（北佐久郡浅間町）は、水源地の村長を管理者に据えて、事務所は畑八村役場内に置くという仲介案を提案し、準備会はこれを受け入れて、幸吉が初代管理者に選出されたのである。

●「夢物語」の実現

翌年の昭和30年4月、県から設立許可の朗報が届き、佐久平上水道組合が誕生した。しかし、工事費の値下げが大蔵省から勧告され着工には時間を要した。また、最大の課題である資金調達は綱渡りの連続で、銀行が融資をためらうなか、時機を失せない予備工事のために、畑八村は多額の工事費を立て替えた。昭和31年10月、畑八村は穂積村と合併し八千穂村が誕生、初代村長に就任した幸吉の指示のもと、水源地と取付道路の整備を進

●45歳で畑八村村長に

井出幸吉は、一八九一（明治24）年11月14日に父竹重と母うめのの長男として南佐久郡畑八村佐口（現南佐久郡佐久穂町畑）に生まれた。井出家では代々男子に「幸」を用いて命名した。父は、同郡平林村岩水（現佐久市平林）の小林家からの婿養子で、銀行と製糸業に携わり県会議員の職にあった。

明治42年に、南佐久郡立乙種農学校（後の臼田高校、現佐久平総合技術高校臼田キャンパス）一回生として卒業、県立木曽山林学校（現木曽青峰高校）に進学し卒業後帰郷して、農林業を営んだ。

めた。豊かな山林を有する八千穂村は、首都圏での「木材特需」の追い風を受けていた。

地元出身の国会議員らの支援を受けて、ついに起債は認可され、昭和32年に臼田館で起工式、本格工事に着手、



農作業に励む村人と幸吉
昭和30年代初め(井出逸雄氏提供)

そして組合事務所の落成式が執り行われた。昭和33年に臼田町、翌年に野沢町、中込町の通水開始となった。昭和35年に工事は完了し、10月2日に臼田高校講堂で竣工式が挙行された。「夢物語」と揶揄された広域水道事業が実現した。

総工事費三億円余、工事期間四年にわたる大事業は、四万人を超える人々(厚生・建設大臣認可計画給水人口)のどを潤した。

竣工を記念して、大石水源と千ヶ日向水源の水を給水する稲荷山配水池(佐久市臼田)に、水道建設記念碑が建立された。この碑文には幸吉の功績とともに、大事業を支えた事務局員の粉骨碎身の努力、畑八村村民への感謝が刻まれた。

●「三〇年先をみていた村長さん」

幸吉とともに村ぐるみの健康管理を進めた佐久病院長の若月俊一は、幸吉を「私心のない立派な方だった。(中略)貧しい者のためなら、いかなる権

力にも屈しなかった」と回想している(岩波新書『村で病氣とたたかう』一九七一年)。

村民は、「荒っぽい返事だが最後まで親身だった」「将来ある若者を育てようとしていた」「村長さんは三〇年先を見ていた」と語った。

家にはよく人が集い、



孫を背負う幸吉 73歳の頃
(井出逸雄氏提供)

妻よしのはいつもそばを打った。お蚕様の「おこあげ」になると、家族総出のもてなしだった。余興の席では「親沢追分」を歌い、白髪頭に手ぬぐいをまき「私のラバさん酋長の娘」を踊った。

●佐久平の発展に向けて

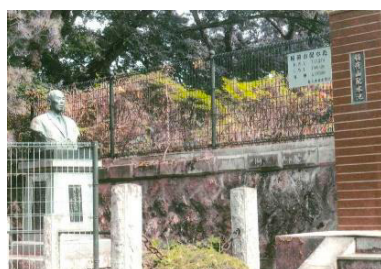
水道は、公衆衛生・生活改善の点から重視されるだけでなく、工場誘致や観光開発など地域産業の発展のためにも重要な基盤である。工務課長の佐々木澄雄は、「佐久地方の大動脈として発展の推進力となり、経営面においても黒字を生み、住民の福祉に向けられる」と記して、広域水道への期待を表した(『佐久水道新聞』第2号昭和35年9月1日)。

衛生的な水道が普及したことで、赤痢などの集団感染は激減した。野沢中学一年生は、昭和36年度水道週間に応募した作文で、「暗い夜道を水くみに行かないで済む。(中略)水道は大事なものの、水道が入って本当によかった」と書いている(『日本水

道協会作品展)。

農村地方広域水道の先駆けである佐久平上水道組合は、周辺の上水道と簡易水道の経営統合を経て、佐久水道企業団に受け継がれ、発足から七〇年、佐久市、佐久穂町、御代田町、東御市の給水人口一二万五六〇〇人余りに成長した(令和8年3月末現在)。

幸吉は、一〇年間務めた管理者の要職を退任してから一年後、昭和40年9月24日に七四年の生涯を閉じた。退任から五年後の昭和44年、佐久水道企業団の理事者らの総意によって、稲荷山公園内の水道建設記念碑の近くに幸吉の胸像が建立された。



稲荷山配水池と幸吉の胸像
(佐々木敏明氏提供)

(新海節生)

参考文献

佐久水道企業団『佐久の水三千年史』一九八七年
南佐久郡八千穂町・八千穂村公民館『八千穂村公民館報縮刷版』一九七六年

宣教と幼児教育に
長年貢献した神父

ガブリエル・ ディアス

(1919 ~ 2010)



フランシスコ会の神父として 1953 (昭和 28) 年に来日し、野沢地区にカトリック佐久教会とカトリック幼稚園を創立。宣教師としてキリスト教を伝え、園長として個性あふれる幼児教育を展開し、多くの園児や地域の人々から親しまれた。

●生い立ち

ガブリエル・ディアスは、南米コロンビアの首都ボゴタから北にある標高二八〇〇mのトカという町に、一九一九(大正8)年1月14日、四人兄弟の二男として生まれた。父は、ジャガイモやトウモロコシの農場を五、六か所と商店を経営していた。

ガブリエルという名は修道名で、本名はルイス・ゴンザロ・ディアス・アルバ...と全部で三個の名字が続く。スペイン貴族の末裔で、ルイス・ゴンザロは名前、ディアスは父の名字、アルバは母の名字、次は祖父母、次は曾祖父母と代々の名字が続いて

いた。

一九三二(昭和7)年、13歳のときに兄とともにフランシスコ会の修道院に入り、一九四四(昭和19)年9月23日、神父となった。小神学校(中学・高校)の教頭、校長、修練院(修道者の養成機関)の副院長を務めた後、大神学校で哲学、神学を教えていた。

●宣教師として日本へ

一九五三(昭和28)年8月、34歳の時に宣教師として日本に派遣された。アメリカから貨物船に乗り、太平洋を渡り、マニラ・香港・長崎経由で9月22日、横浜港に到着した。船上から、富士山とそこに沈む真っ赤な夕日を見て「感動した」と語っていた。

昭和29年、フランシスコ会が担当するカトリック長野教会に着任した。翌年、カトリック小諸教会に転任し、小諸市に暁の星幼稚園を創立した。南佐久郡野沢町(現佐久市野沢)の人々は、ガブリエルを訪ね、野沢地区での幼稚園設立を陳情した。昭和35年、ガブリエルは、コロンビアフランシスコ会日本管区長となり、母国コロンビアを始め各国の教会に募った寄付金



昭和 37 年 野沢地区に建設中の園舎

で、野沢地区に約二〇〇坪の敷地を購入した。翌年佐久に赴き、昭和38年1月、「聖家族・野沢カトリック教会(現カトリック佐久教会)」を、6月、「カトリック幼稚園」を創立した。園舎の建設中から近隣の人々に「カトリック幼稚園」と呼ばれ親しまれていたことから、それを正式名称とし、「地域の人たちが名前を付けてくれた」とうれしそうに語っていた。

●園長として

ガブリエルは、「子に勝る宝はない」と、「一人一人の人格を重んじる」ことを方針とした。そして、「家庭教育の重要性」を説き、父親の子育てへの参加を求めた。園行事に両親が参加することを呼びかけ、父親も園活動に携わった。そのことは、自然に幼稚園と家庭を一つにし、園全体が大きな家族のようになった。

ガブリエルはさまざまなアイデアで、子どもたちの好奇心や探究心を刺激した。水路を引き、廃品で作った手作りのオブジェを並べ水力で廻し、ボートも浮かべた。池にハクチョウ、コクチョウ、アヒル、カモを飼い、鳥小屋にはハト、



創立当時 園庭のアヒルの池の周りで

シチメンチョウ、ホロホロチョウ、クジャク、ウサギもいた。ヤギも飼い、乳しぼりをして園児に振る舞った。自然豊かで動物と触れ合える創意工夫の園庭は、地道に創り上げた情操教育の場であった。

園内には「博物館」を作り、昔の物や外国の物、鳥や動物のはく製を陳列した。「図書館」も作り、読書の楽しさや読み聞かせの大切さを伝えた。

ガブリエルの周りにはいつも子どもたちがいた。わざと子どもの名前を間違えては「違っ

よー」と笑わせていた。また、ある子が

好奇心から池のアヒルに雪玉を投げた。

それを見ていたガブ

リエルは、投げた雪

玉の数だけアヒルの

絵を描かせた。一度としない約束を取り交わし、愛情をもって、思いやる心を育てた。

佐久市がやまびこ国体の柔道会場になると分かったとき、日本の伝統文化の武道を子どもたちに体験させたいと開催の前年の一九七七（昭和52）年に専門講師を迎え、柔道を取り入れた。翌年、佐久総合体育館で園児とともに柔道の試合を観覧したガブリエルは、相手を敬い、礼に始まり礼に終わる武道の精神に感銘を受けた。その後、剣道も



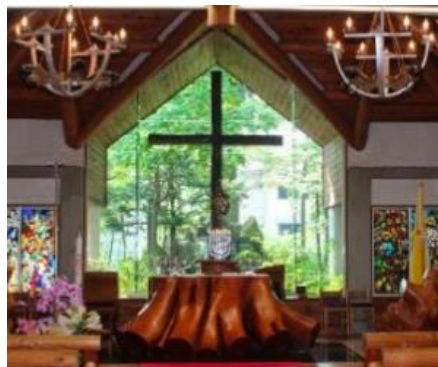
平成12年 イチョウの葉の絨毯 じゅうたん

取り入れ、年長児が柔道・剣道を体験する活動は現在までも続いている。

二〇〇四（平成16）年、こうした長年の教育実績が認められ、「善を志向する精神の育成を目指す教育の実践と幼児教育の振興に寄与された功績」により、市長表彰された。

●神父として

教会聖堂には、樹齢四〇〇年以上のケヤキの切株でできた大きな祭壇がある。自らの切株の皮をはぎ、磨き、造り上げた。さらに、ガブリエルがデザインした佐久鯉のシャンデリアには佐久への敬意が込められている。



ケヤキの祭壇と佐久鯉のシャンデリア

庭には、桜を始め、さまざまな樹木や花を植えた。自然豊かな園庭は、地域の憩いの場ともなった。

ガブリエルは人を大切にし、来客を心からもてなした。しかし、自身の生活は質素で、食事は慎ましく、毎日着ていた修道服は縫いを重ねたものだった。

出会った人が亡くなったときには、何をにおいても弔問に駆け付け、残された家族を慰めた。人との

交わりを大切にしたその人柄は、幼稚園、教会のみならず、広く地域の人々から愛された。

一九五三年に来日し、二〇一〇（平成22）年1月28日帰天までの五十七年間、宣教師としての志を貫き、一度も帰国しなかった。最後まで手元に置き、握りしめていたものは、色あせた家族の写真だった。園舎が見える教会の部屋で最期を迎え、スペイン語の混じる言葉のなかで最後に話した日本語は、「みんなに、ありがとう」だった。

ガブリエルの葬儀には、幅広い年代の親子や家族が参列した。「家族のつながりを大切にすると」いう教えが、世代を超えて受け継がれていた。

帰天するまでに送り出した卒園生は、二九九五名。その後も卒園生は増え続け、ガブリエルの愛情と精神は、今もお受け継がれている。



昭和60年 ヤギと読書

（望月清泰・中村静枝・井出美生・林さと美）
写真提供：カトリック幼稚園

佐久の先人たち⑥2

特攻に散ったプロ野球選手

わたなべ しずか
渡辺 静

(1923 ~ 1945)



小諸商業学校の四番打者として活躍。職業(プロ)野球朝日軍に入団するも、学徒出陣で陸軍に入営。特別攻撃隊を志願し、第165振武隊として知覧特攻基地から出撃、特攻死した。

●「鎮魂の碑」

東京都文京区の東京ドーム外周東側ゲート前に、第二次世界大戦で戦死した職業(プロ)野球選手七六人の名前が刻まれた「鎮魂の碑」が建っている。碑には、沢村賞に名を残す東京巨人軍(現読売ジャイアンツ)の投手沢村栄治や大阪タイガース(現阪神タイガース)の強打者景浦将(かへつし)など、戦前の職業野球人を代表する選手が名を連ねている。

このなかで、航空機に爆弾を搭載して敵艦隊に体当たりする航空特攻で亡くなった選手が二人いる。一人は、一九四五(昭和20)年5月11日、海軍

神風特別攻撃隊第五筑波隊として鹿児島県鹿屋特攻基地(現鹿屋市)から出撃、沖縄沖で特攻死した、日本野球団名古屋軍(現中日ドラゴンズ)の投手石丸進一。もう一人が、陸軍特別攻撃隊第一六五振武隊として、6月6日に鹿児島県知覧特攻基地(現南九州市)から出撃、沖縄海上で22歳の生涯を終えた朝日軍の渡辺静である。



「鎮魂の碑」長野県出身者六人の名前も刻まれている

●小諸商業から朝日軍へ

一九二三(大正12)年4月、協和村士林(現佐久市協和)に生まれ、協和尋常高等小学校(現望月中学校)から進学した小諸商業学校(後の小諸商業高校、現小諸義塾高校)で四番打者として活躍した静は、繰り上げ卒業後の昭和18年1月に朝日軍に入団した。背番号は20、選手登録は投手である。入団した理由は、昭和16年の全国選抜中等学校野球大会(現選抜高校野球大会)で優勝した愛知県東邦商業との練習試合(延長12回引き分け)で静の活躍を知った朝日軍の監督が熱心に勧誘したこと、出場が有力視されていた同年の全国中等学校優勝大会(現全国高校野球大会)が「支那事変」以降の戦況の激化により中止(幻の甲子園)となったこと、朝日軍とともに大阪専門学校(現近畿大学)

の在籍(商科・一期生)も認められたことによる。徴兵検査が迫っていた静にとって、26歳まで徴兵が猶予される大学・専門学校に在籍することは魅力的であった。

しかし、職業野球のレベルは高く、公式戦での出場はわずか二試合に終わる。5月23日の甲子園球場での大和と、7月6日の後楽園球場での南海(現福岡ソフトバンク)との対戦で、いずれも投手ではなく、代打での出場であった。

●学徒出陣と「最後の野球」

昭和18年9月、政府は学徒に対する徴兵猶予を停止、翌月には徴兵適齢に達している学徒に臨時徴兵検査を実施し、合格者は陸海軍に入営・入隊させると発表した。学徒出陣である。

満20歳を過ぎていた静は徴兵検査を受け(甲種合格)、11月19日に朝日軍を一年で退団、金沢の東部第四九部隊に入隊する。翌年、幹部候補生試験と陸軍特別操縦見習士官(特操)に合格した。特操は、繰り上げ卒業や学徒出陣で陸軍に入営した学徒を短期間で航空機搭乗員に養成する制度で、各地の飛行学校教育隊での訓練を経て、実戦部隊に配属するものであった。

静は、熊谷飛行学校相模教育隊↓館林教育隊↓鹿児島太刀洗飛行学校知覧教育隊↓太刀洗飛行学校目達原教育隊を経て、昭和20年2月、陸軍少尉に任官した。

教育隊での訓練は厳しいものであったが、特攻出撃の三か月前、目達原教育隊で開催された部隊内での野球試合で、自ら投手を志願した静のボールを誰も打つことができず、このとき隊員は静が元職業野球選手だったことを初めて知ったというエピソードがある。静にとってこれが「最後の野球」になった。

●「特攻隊員として、近日中に攻撃します」

昭和20年3月6日、静は特別攻撃隊に「志願」、5月5日、陸軍明野教導飛行師団（現伊勢市）で編成された第一六五振武隊員となる。隊員はいずれも特操二期生で、うち一人は小川村出身で上田蚕糸専門学校（現信州大学繊維学部）から学徒出陣した和田照次であった。

5月16日、静は帰省した。常陸教導飛行師団（現ひたちなか市）で受け取る予定であった特攻機が一機不足したため、抽選で漏れた静が、明野教導飛行師団に帰隊する途中に生家に立ち寄ったのである。

将校の制服に長い軍刀を携えて現れた静は、両親や長兄、帰郷していた弟の前に、「自分は、特別攻撃隊として、近日中に攻撃します」と述べたという。

6月4日、出撃命令が下るが、沖縄の天候不良により中止。同日の日記には「今日も生命が生延びたか、此の世の中に居る日、死がにぶる、心が残る。

一日も早く沖縄へ参りたい」と記されている。

一二後の6日、午後1時30分、負傷入院中の隊長を除く五名は、三式戦闘機「飛燕」に二五〇kg爆弾を搭載して知覧特攻基地から出撃、全員が沖縄西方海上の敵艦船群に突入、特攻死した。出撃の様子は、13日付『信濃毎日新聞』で報道された。



出撃直前の静
(渡辺和夫氏提供)

●「野球生活 八年間」
静は、遺族が戦後、表紙に「思ひ出 静」と書いたノートに、5月30日から出撃までの心境や両親への遺書を記した「日記」を残している。戦後、他の遺品とともに、滋賀県八日市飛行場から遺族に届いたものである。

最初のページに「海ゆかば」の歌、次のページに両親・兄弟の名前、その次のページに集落、国民学校、神社、蓼科山、麓の協和牧場など協和村の地図を万年筆で細かく書いている。

そして、「忠孝一本 一機一艦 体当り 轟沈、いざ征かん 雨も風をも 乗越へて 沖縄の玉と砕けん」という時世の歌の次に、「野球生活 八年間 わが心 鍛へくれにし 野球かな 日本野球団 朝日軍 渡辺静」と書いたページがある。

「野球生活 八年間」とは、北佐久郡小学校野球大会で優勝した協和尋常高等小学校

二年から、「最後の野球」までの八年間を指すものと思われる。静の野球生活の原点は、故郷である協和村であった。

知覧特攻基地か

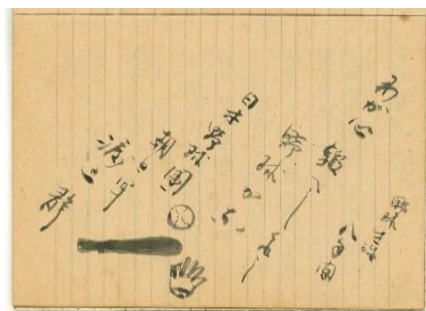
ら出撃した特攻隊員の写真・遺書・手紙・遺品などを展示する知覧特攻平和会館（現南九州市）のコーナーには、「日記」や父への手紙のコピー、朝日軍時代のバット、マスコット人形など、静の遺品が展示されている。

（伊藤純郎）

参考文献

中島正直『白球にかけた青春 陸軍特攻隊員 渡辺静』
櫛、一九八六年

伊藤純郎『航空特攻隊 空に散った信州人』信濃毎日新聞社、二〇二四年



「野球生活 八年間」のページ
(渡辺和夫氏提供)

佐久の先人たち(63)

佐久の音楽の裾野を広げた
ピアノ教師

さ さ き まさこ
佐々木 方子

(1924 ~ 2000)



高校の音楽教師を勤めた後、自宅でピアノと声楽を多くの子どもたちに教えた。「音楽を専門的に学ぶなら佐々木先生」と言われ、国内外で活躍する教え子を数多く輩出し、佐久の音楽の裾野を大きく広げた。

●ピアノへの憧れ

佐々木（旧姓中澤）方子は、一九二四（大正13）年、常和村（現佐久市常和）出身の父睦次郎と平賀村（現佐久市平賀）出身の母かずの間に7人きょうだいの長女として神戸に生まれた。父が兵庫県立第一神戸中学校（現兵庫県立神戸高校）の教員だったことから、神戸市東灘区（ひがしなだ）の前身、御影町で9歳まで過ごした。音楽好きの母の影響もあり、自ら望んで7歳から先生についてピアノを習い、早くから才能を開花させた。父の転勤に伴い15歳まで新潟県新発田市（しばた）で過ごし、昭和14年、新潟県立新発

田高等女学校（現新潟県立西新発田高校）3

年の秋、上田高等女学校（現上田染谷丘高校）

に転校した。ピアノの

先生より先に曲が弾けてしまう方子には近隣

に適切な先生が見つからず、転居後も新発田へレッス

ンに通った。その後武蔵野音楽学校（現武蔵野音楽大学）で一年間学び、東京音楽学校（現東京芸術

大学）師範科に入学。戦時下だったが、卒業後もつ

ながりをもち続けた多くの仲間と出会う。

●八面六臂（はつめんろくべい）の子育て時代

音楽学校卒業の翌昭和21年4月、長野女子商業学校（現長野商業高校）に赴任。5月、復員したばかりで社会科教員となる佐々木利雄と結婚、臼田町（現佐久市下越）に移り住む。音楽学校出身の方子への期待は大きく、佐久の教員に請われ、結婚後間もない7月から23年4月までの約二年間、臼田高等女学校・臼田高校（現佐久平総合技術高校）臼田キャンパスに勤務。「終戦後の何もない時代に、若くモダンな「佐々木先生」は女学生の憧れだった。当時教わった「美しき青きドナウ」は今でもクラス会の度に皆の口にはのぼるといふ」（平成3年7月28日付『東信よみ（三）』）。

昭和25年3月から27年3月までの二年間は野沢



音楽学校卒業のころ
（昭和20年）

北高校に勤務。『岳南会ニュース』第10号（平成12年1月1日）によ

ると、昭和26年11

月に東京で開かれ

た「全日本学生音

楽コンクール東日

本大会」に音楽班

を県代表として出

場させ、「初の女性

教師となった佐々

木方子先生指導のもとに、音楽班はめざましい活躍をみせた」といふ。

昭和22年4月に出産した長女に続く年子三人を含む四人の子どもを生み育て、戦後の混乱期のため一人に膨れ上がった家族の世話をし、農業を手伝いながら、学校では目覚ましい活躍を見せるといふ八面六臂の子育て時代であった。

●厳しくやさしいピアノ指導

高校退職後の昭和27年、方子28歳のとき、子育てと義父母の介護に追われるなか、自宅でピアノ教室を開始した。「当時佐久地方には教室がなく、同地方一円から生徒が通ってきた。これまでに教えた生徒の数は数百人、このうち一五〇人くらいは音楽大学へ進んだといふ」（平成3年8月11日付『信濃毎日新聞』）。

ピアノ教室の生徒は、「佐々木先生は怖かった」



第二回郡下高校音楽会
（昭和26年）

と口を揃える。練習をさぼると容赦なくしかられた。特に受験生の指導には心血を注ぎ、課題ができるまで熱心に教えた。年明けになると毎日のようにレッスンをし、ときには自宅に泊まらせたり、夫の利雄が英語などを教えたりして支援したという。「音大受験の前はトンカツを作って食べさせてくれた」「試験に出そうな問題を思い出して曰田駅まで走ってきて教えてくれた。それが見事の中」など、情熱的なエピソードには事欠かない。

桐朋学園大学や小諸高校音楽科の元講師でピアノ二ストの小澤英世は、方子に弟子入りした小学生のころの思い出を、次のように語っている。

中間部で激しい曲想になるハイドンを弾いたとき、ちょうど激しい雷雨になった。「ほら、あなたが嵐を呼んだのよ!」と幼子を喜ばせ輝かせてくれた。直観的にひらめく人。大事なことを決して見逃さない先生だった。

桜美林大学教授でオペラ歌手の小林玲子は、ピアノから歌の道に進んだ経緯を、次のように述べている。

「音大に行くなら佐々木先生」の言葉どおり高1で門をたたいたとき、「弾き方がなっていない、帰りなさい」と。すぐごと玄関に向かったとき「いい体格してる、いい声出そうね」と発声をみてくれ、「音楽なら行けるわよ」と。その後東京の先生を紹介してもらったが、学費が大変で

あることをこぼすと、「どろぼうに盗られない『本物』を身に着けなさい」と言っただけで両親の迷いも断ち切ってくれた。

こうした出会いにより小林は、イタリアオペラ界で活躍する歌手となり、後進にも道を開いた。

一方、方子に見出されて声楽（テノール）の道に進み、方子から多くの生徒を受け入れて世に出した名古屋芸術大学元教授・中島基晴は、「大学で多くの学生のレッスンを受け持つようになったが、（中略）先生の教育法が知らぬ間に私の遺伝子に入り込み、『厳しさとやさしさを持って指導にあたれ』といつても言っています」と記している（『佐々木方子先生追悼演奏会プログラム』平成14年11月24日）。

●合唱文化の発展にも大きく貢献

方子は、地域の合唱団の指導にも力を入れ、昭和29年11月、「田口村青年団合唱班」を県1位に導いた。昭和34年、方子の指導を受けた野沢北高校音楽班のメンバーが母体となって「FFソサエティ」が結成され、男性合唱団として「佐久市民コーラスまつり」に参加するなど長く活動した。

昭和48年から60年までの二二年間は、「曰田合唱団」（現クワイアグリーンヒル）の指導に情熱を注いだ『クワイアグリーンヒル創立50周年記念誌』（令和6年8月）には、「コールユーブンゲンみたいな専門的なことを教わって、やればもっとうまくなる

んじゃないかと、皆に意欲が湧いてきた」と現在のメンバーが方子の指導を振り返っている。このように、方子は、佐久地方の合唱文化の発展にも大きく貢献した。

●音楽への情熱を貫いて

昭和32年「佐々木方子門下生第一回音楽会」以後、四四年連続して発表会を開催。毎回多くの生徒と卒業生によるプログラムが組まれ、睡眠時間を削って準備にあたった。特に、昭和59年の「還暦



還暦祝記念音楽会（昭和59年）

祝記念音楽会」には生徒五四人と卒業生一七人の総勢七一人が中込市民会館に集い、プログラムは大判三つ折りとなるほどの盛況ぶりであった。

夫の介護を終えた二年後の平成12年夏、第四回音楽会の後体調が悪化し入院。11月の一時退院の際は、駿生を呼んで指導するなど最後まで情熱を失うことはなかった。そして、「真面目によく働いたわね」の言葉を残して12月5日に七六年の生涯を閉じた。奇しくもモーツァルトの命日であった。

写真提供：佐々木充氏

（柳澤礼子）

女性史研究家で、
人間解放を唱えた思想家

もろさわ ようこ

(両澤 葉子)
(1925 ~ 2024)



(撮影・宮坂雅紀)

1960年代からジェンダー視点で歴史を掘り起こし、『信濃のおんな』は地域女性史研究の先駆けとして評価される。「歴史を拓くはじめの家」を開設し、志を同じくする人々との「志縁」による人間解放を唱え、実践した。

●志への共感で結ばれる「志縁」

蓼科山を望む佐久市望月の丘の上に、もろさわようこ（両澤葉子）が、全国の賛同者とともに開設した交流拠点「志縁の苑」はある。一九八二（昭和五七）年に「歴史を拓くはじめの家」として設けられ、二〇一三（平成二五）年に現在の名称に改められた。単なる施設ではなく、一人ひとりが自らの意思で参加し、その関わり方も自身で考えることを原則に、地縁や血縁に依らず、志や生き方への共感で結ばれる「志縁」を育んできた。

「はじめの家」は、物が豊かになり、暮らしも便



志縁の苑（外観）

利になったものの、環境破壊が進み、人間が利益の対象として扱われ、人間関係がやせ細る社会への鋭い批判から、「愛にみちて歴史をひらき、こころ華やぐ自立を生きる」という理念を掲げた。愛とは他者の痛みを自分の痛みとし、それをなくすこと。歴史を拓くとは、人々の過去の体験に学び、その知恵を暮らしに生かして、心豊かに交流できる暮らしをつくることである。資本主義を始め既成の価値観に代わる新しいものを生みだそうとする思想運動の側面を持っている。

●「男ならよかった」と言われ

ようこは、一九二五（大正一四）年二月十三日、本牧村（現佐久市望月）の養蚕農家に生まれた。乳母車があるような裕福な家だったが、父は遊び好きで、料亭に入り浸った。父と母の仲は悪く、貧しくても仲の良い家庭がうらやましかった。

女性性は結婚して、出産し、子育て



小学校入学のころ
2人の弟と（著者提供）

するのが「一人前」の時代だった。母のように男に振り回される生き方はしたくないと誓い、苦学して医師になった南佐久郡出身の竹内茂代に憧れた。

小学生のある夏休みのことだった。母の実家で風呂用の水くみをしていると、祖父が「女が空バケツを振り回して、鼻歌を歌って歩くとは何事か！」と怒鳴って駆け寄り、ようこの頬を打った。周りの大人たちも、臆せず意見をはっきり言うようこに、「あなたは男に生まれればよかった」とよく言った。「どうして女ではないけないの？」。周りの大人たちの言葉が、ようこの胸に「女とは何か」という疑問の種をまいた。

世界的な不況で養蚕業が打撃を受けたこともあり、本牧尋常高等小学校6年の2学期を終えて生地を離れて、埼玉の開業医宅に身を寄せて高等小学校を卒業した。働きながら独学で勉強を続け、一九四二（昭和一七）年に難関の専門学校入学者検定に合格。一九四五（昭和二〇）年3月の東京大空襲後、帰郷した。疎開してきた陸軍士官学校生徒隊本部の筆生（事務員）となり、20歳で敗戦を迎えた。

●言葉の中身を生きる

戦時中、国のために命を懸ける覚悟をしたが、敗戦で価値観が一変した。権力の側が打ち出す言葉は「どんなにすてきな言葉でも、その意図は何かを自分で検証しないうちはうなずかない」。そう決意し、再びだまされないために平和憲法を道しるべ

に、自らの言葉に責任をもって戦後を歩み始めた。

上田市の印刷所、北信毎日新聞の記者、鐘ヶ淵紡績丸子工場で働く女性労働者らの企業内学院「鐘紡丸子高等文化学院」で国語を教える教員を経て、一九四九（昭和24）年に上京する。一九五〇年代には女性参政権の実現に尽力した市川房枝に見出されて、『月刊婦人展望』（現『女性展望』）編集の中心的メンバーとなった。フランスの女性の思想家・哲学者のボーヴォワールに影響を受けて、女性であるがゆえの生きがたさや葛藤をまとめた一作目の『おんなの歴史』を一九六五（昭和40）年に出版した。社会的・文化的につくられ、期待される「男らしさ」「女らしさ」といったジェンダーの概念が一般的でなかった時代から、男女ともに社会的・文化的につくられた性差別構造を生きていると鋭く批判して人間解放を求めた。女性を指す言葉として「婦人」が一般的だった一九六〇年代、蔑視的でもあった「おんな」をあえて使って女性差別を見据え、差別が生まれる構造を問った。信濃毎日新聞に連載した長野県の女性通史「信濃のおんな」（一九六六年6月～六八年8月）をまとめた『信濃のおんな』（一九六九年）で第三回毎日出版文化賞を受賞して注目を集め、地域女性史の先駆けと評価された。女性史でアジアへの侵略戦争を支えた日本女性の戦争責任を巡る議論が一九七〇年代半ばから本格化する以前に、女性の共犯性を指摘。『おんな・部落・

沖縄』など市井に生きる生活者の視点から女性と社会の関わりを考察している。

●自分を新しくして歴史を拓く

「はじめの家」に続き、沖縄県の女性の祭祀に女性史の原点を見出し、一九九四（平成6）年に平和と沖縄の生活文化を学ぶ拠点「うちなあ」を玉城村（現南城市玉城）に、一九九八（平成10）年に部落差別など人権問題に向き合う「よみがえりの家」を高知市に設けた。これらは、一人ひとりが自分の体験を通して社会問題を考え、語り合うなかで、参加者自身の生き方を問い直す場だった。「だめ」というには新しいものをつくりだして初めて否定になる」。生涯を懸けた実践となる。

一連の活動が評価されて、二〇〇五（平成17）年に第一二回信毎賞を受賞した。ようこは、理不尽な差別に苦しみながらも懸命に生きる人を念頭に、他者の痛みをなくすために、みんなで力を合わせることが「人が生きる」ことであると訴え続けた。

亡くなる数年前まで佐久と沖縄、高知を行き来して暮らし、思索を深めた。家制度を基準にした風俗から抜け出すため、二〇二三（平成25）年に一般財



志縁の苑で（著者提供）

団法人「志縁の苑」を設立し、自分名義の建物や土地を法人に寄付した。「生きている限りは自分を新しくしていかなきゃ。自己解体しないで、言葉だけ新しいものを求めても、ちっとも歴史は動かない。一人ひとりが自分を新しくしていくときが、歴史が新しくなるときだと思う」。自らの言葉のとおり、学び、書き、人と語り合い続けた人生は、二〇二四（令和6）年2月29日にその幕を下ろした。ようこの志をつなぐ人たちは「志縁の苑」をはじめ各地で活動を続けている。

（河原千春）

参考文献

もうさわようこ『おんなろん序説』未来社、一九八一年
『新編おんなの戦後史』ちくま文庫、二〇二二年
佐藤文香・伊藤るり編『ジェンダー研究を継承する』人文書院、二〇一七年
河原千春編著『志縁のおんな——もうさわようこわたしたち』一葉社、二〇二二年

佐久の先人たち⑥5

やまびこ国体 3 位入賞に
導いた新体操指導者

はらだ きしこ
原田 岸子

(1926 ~ 2014)



野沢南高校ほか長年新体操部の指導者を務め、監督として昭和 53 年やまびこ国体長野県少年女子チームを第 3 位入賞に導いた。自他ともに厳しく人を伸ばす指導法や、明るくざっくばらんな人柄で知られ、地域の子どもたちや女性を中心に体操を広め健康意識の向上に寄与した。

●松原湖畔で誕生

原田（旧姓畠山）岸子は、一九二六（大正 15）年 4 月 3 日、北牧村（現南佐久郡小海町）に、後に北牧村村長となる父賀、母きさおの八人きょうだいの一人娘として生まれた。松原湖の湖水の岸で生まれたという理由で、父が「岸子」と命名した。

昭和 7 年、北牧尋常高等小学校（現小海小学校）松原分教場に入學し、5 年生から二年間、片道六 km 離れた本校に通った。父は、女性も教育を受けなければならぬという考えを持っており、母は、岸子の帰りが遅くなると提灯を点け迎えに立っていた。

てくれた。

●女学校時代

小学校卒業後、野沢高等女学校（現野沢南高校）に進学した。岸子は、後年、女学校時代の思い出を、次のように述べている。「精神修行の面で自分を支えてくれた授業がある。毎週水曜日 3・4 時間目 2 時間続きの職員・生徒による坐禅の時間である。礼法室で無私の境になり 50 分経過すると『般若心経』を唱え、校長の説教と続く。今の生徒には通用しないと思うがこのような経験も長い人生道中には必要である。学問では学び得ない『根性』づくりに大いに役立っている」（『野沢南高校新聞』第 90 号、昭和 49 年 3 月 3 日発行）。

昭和 16 年、高等女学校の 2 年生のとき、太平洋戦争が始まった。岸子は、女性パイロットになるという夢をもっていたが、運動が得意だったことから体育教師の進路を選択した。

戦争真っただ中の昭和 18 年、日本女子体育専門学校（現日本女子体育大学）専門専修科二年制に入學し東京での寄宿舎暮らしを始める。一緒に入学した同期生の多くは、疎開のため実家に帰ってしまったが、歯を食いしばっても卒業しなくては親に申し訳ないと学業に励んだ。昭和 20 年 3 月に卒業し、体育教員の免許状を取得した。

●新体操指導者としての教師生活

昭和 21 年 4 月飯田市立高等女学校（現飯田風越

高校）の体育教師として赴任、昭和 22 年から母校である野沢高等女学校へ転勤し、昭和 25 年岩村田高校、昭和 36 年小諸高校（現小諸義塾高校）と歴任した。小諸高校時代には体操部の顧問として新体操の前身となる団体徒手体操を組み入れた。昭和 43 年の全日本学生新体操選手権大会から正式に「新体操」の名称が使われるようになった。

昭和 45 年 4 月、再び野沢南高校に赴任し、本格的に新体操の指導に力を入れ、国民体育大会（現国民スポーツ大会）への出場を目指した。

新体操の基礎も練習方法も分からなかった岸子だったが、東京の新体操強豪大学に指導法を学びに赴き、自分で創意工夫をするなどして、生徒の競技力向上、人間性育成に励んだ。岸子自身の負け

ず嫌いな性格もあり、他校に負けない強い意志が伝わる指導を実践した。授業の際は、佐久言葉を上手に操り、緊張感もありながら、笑いが起こる明るい先生で



昭和 52 年 野沢南高校鈴蘭祭にて
（諸澤茂美氏提供）

あった。

昭和49年静岡、昭和50年東京、昭和51年長野県開催全国大会（インターハイ）の連続出場を果たした。岸子は、新体操には女性特有の美しさ、基礎力（筋力、ジャンプ力など）が必要との考えをもち、他県では中学生から全国大会に出場している選手もいるなかで、高校から始めた生徒を育てる苦しさを多くの場面で語っていた。少しでも得点を上げるためには、ミスのない演技をすることが必要である、ノーミス演技ができるまで、繰り返し練習に挑み続けた。

●「やまびこ国体」で三位入賞

昭和53年、長野県で開催された第三三回国民体育大会「やまびこ国体」新体操競技において、野沢南高校は指定校となった。

強化合宿のなかで生徒が心身ともに疲労し体調を崩すと、懇意の指圧の先生から指導を仰ぎ、岸子自身も他人に告げるこ



昭和 53 年 やまびこ国体出場選手と
(諸澤茂美氏提供)

となく指圧の施術を受けていた。満身創痍で取り

組んだ「やまびこ国体」はノーミスで「少年女子の部」で見事三位入賞を果たし、その後も数年にわたり県大会優勝を続けた。

教員として仕事、部活動の指導、二人の娘の子育て、娘たちの授業参観や家庭訪問など、日々多忙な状況を支え続けたのは一番の理解者である義母と夫であり、かけがえない存在であった。

●第二の人生

昭和56年3月、54歳まで三六年間勤めた教職を野沢南高校を最後に辞した。岸子は、「まだやっているの?」と言われるのと「もう辞めたの?」と言われるのでは人生の価値観が違つと語り、教職を離れてすぐ、ジャズ体操講師とし、第二の人生を歩み始めた。ジャズ体操は、音楽に合わせて、背中を中心に筋肉をどのように、何のために動かすのかを心がけ全身を動かす「健康体操」で、同年秋には、佐久市武道館で「原田岸子ジャズ体操教室」を始め、夫も早期退職をし岸子を支えた。

一時間半のレッスンは、音楽に合わせて簡単なステップのほか、「健康体操」の特徴的な運動のなかに指圧を取り入れ、各部位のツボを刺激する動きを組み入れて楽しく体を動かすもので、多くの体験者から大好評を得た。武道館いっぱい受講者が参加し、全員が熱心に体を動かすその情景は、岸子の情熱と地域の女性が求めていた活動欲求・健康志向に満たされていた。各地区での体操教室

の実施依頼を受け、一四団体の講師を務め、全国体操指導者連盟の役員も務めた。また、岸子を慕っていた新体操部員や卒業生などが講師を務め、地域での健康体操普及に尽力した。



ジャズ体操を指導する岸子
(原田秀美氏提供)

心身ともに強靱^{きょうじん}であったが、病には勝てず、二〇一四（平成26）年87歳で逝去した。戦時下の空襲を体験して培った「絶対に負けない」という信念のもと、体操に人生をかけた人物である。

（長田芳子）

参考文献

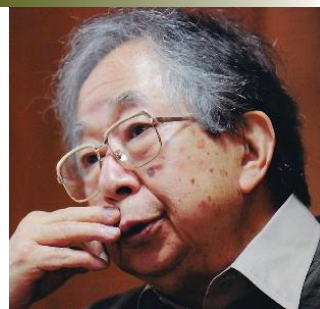
はしろうまんがう『永世人文録「原田岸子」戦火の果てに』
芙蓉出版社、二〇〇四年

佐久の先人たち⑥6

時代を、人間を
描き続けた作家

い で まごろく
井出 孫六

(1931 ~ 2020)



(信濃毎日新聞提供)

「戦争を二度と起こしてはいけない」という強い信念を生涯持ち続け、恵まれない状況のなかで必死に生きる有名無名の人々を取材して、その生きざまを描き続けた。作家として小説やルポルタージュなど50を超える作品を残している。

●編集者から文筆活動の道へ

一九三二（昭和6）年9月20日、臼田町（現佐久市臼田）に生まれる。生家は三〇年以上続く造酒屋で、一〇人姉兄の末っ子だった。長姉は農村女性の解放に生涯をささげた丸岡秀子、三木内閣の官房長官などを歴任した一太郎は長兄で、ともに『佐久の先人』に選定されている。また、元共同通信社論説委員長の武三郎、医学者源四郎を兄に持つ。ユーモアにとみ、「頓智小僧」の愛称をもっていたといわれる（井出生「井出孫六を知る！」『公民館報さくし』No.223、令和5年10月）。

野沢中学校（現野沢北高校）、府立九段中学校（現都立九段高校）を経て、昭和30年東京大学文学部

仏文科を卒業。中学・高校教諭を経て、昭和33年中央公論社に入社する。昭和36年2月、雑誌『中央公論』の一九六〇年12月号に掲載された深沢七郎「風流夢譚」の天皇表現をめぐり、一人の右翼少年が中央公論社の社長宅に侵入し、社長夫人に重傷を負わせ、家政婦を死亡させるという事件が起きた。井出はその渦中において、何とか言論表現の自由を守ろうと仲間とともに努力を重ねるが、物書きになりたいという思いもあり（昭和41年、「非英雄伝」で第五回直木賞候補）、昭和44年に退社し、文筆活動に入る。主に小説、ルポルタージュなどを執筆する。



青木村で『青木時報』を調査
(2003年) (信濃毎日新聞提供)

昭和48年に『秩父国民党群像』（新人物往来社）で作家デビューし、昭和50年画家川上冬彦の最期を描いた『アトラス伝説』（冬樹社）で第七二回直木賞を受賞。昭和61年『終わりのなき旅——「中国残留孤児」の歴史と現在』（岩波書店）で第一三回

大佛次郎賞を受賞する。

●一九四五年8月15日が原点

井出の執筆の原点は一九四五（昭和20）年8月15日にあった。京都大学医学部に在籍し、若狭湾の海軍工廠にいた五兄の敬吾が7月末に突然帰省し、「俺の見るところ、8月15日がやばい。わが国は滅亡する」と言いながら一枚の英文ペーパーを出し、「原子爆弾がまもなく日本に持ちこまれることを明快に図解してくれた」という。兄の言葉どおり原爆が落とされ、15日の終戦を迎える（「僕等の八月一五日」第四回藤原正彦エッセイコンクール2018「特別作品」）。

野沢中学2年生だった井出にその日の記憶は鮮明に刻まれていた。「空には雲一点もない晴れた夏の盛りだった。……あの一日の午前中は、どうしても昭和20年8月15日と呼ばなければおさまりがつかず、あの一日の午後はどうしても一九四五年8月15日としか呼びようのないものとして、わたしのなかに定着している」と記している（昭和ヒトケタの遺恨『世界』、一九七五年12月）。

●「戦争の記憶を消してはいけない」

第二次世界大戦下、長野県からは三万三〇〇〇人を超える人々が「満蒙開拓団」「満蒙開拓青少年義勇軍」として大陸に送り出されていた。長野県は全国一の送出県であった。井出は、生涯このテーマを追い続け、戦後帰還した「中国残留孤児」を

全国に訪ね、平成元年に『終わりになき旅―「中国残留孤児」の歴史と現在』を岩波書店から刊行した。

また、二〇〇三（平成25）年には、阿智村に開館した満蒙開拓平和記念館名誉顧問に就任、平成27年には「中国残留孤児」が国に対して起こした国家賠償請求訴訟で、原告側証人として陳述を行った。

「戦争の記憶を消してはいけない」は井出が折に触れ口にした言葉であった。それに続けて「国家は何をしたのか、いま何をしようとしているのか」「そのとき民衆はどうなったのか、いまだどうなっているのか」と問う。

それゆえ、井出の仕事は、戦争を厳しく問い続けるなかで生き抜いた、また死んでいった有名無名の人たちの記録を掘り起こし、民衆とともに歩む人たち、恵まれないなかで必死に生きようとする人たちを描いていく。

その一人が信濃毎日新聞の主筆として昭和8年8月に「関東防空大演習を唾（つ）う」を書き、軍部の怒りを買ひ、命尽きるまで、個人雑誌『他山の石』において日本の戦争政策を批判し続けた桐生悠々（きりゅうゆう）で、井出は岩波新書『抵抗の新聞人 桐生悠々』でその生涯を描いている。

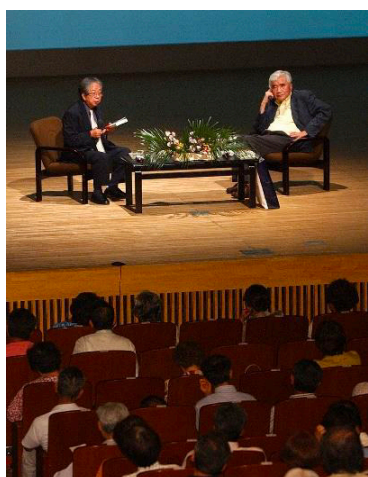
民主主義への熱い思いは、生家の茶の間にかはられている畳一畳ほどもある中江兆民の書による扁額「民为重」の由来を語っているときによく表れている。「民は重きをなす」あるいは「民をもって重し

となす」と読める「兆民の筆蹟を幼児のころから眺め親しんできたのだと気づいた時、私は狼狽（ろうばい）に似た愕（おどろ）きにとらわれた」と記している（『中江兆民全集第八巻月報』一九八四年2月）。そして、大正『デモクラシーの流れを受け、小日本主義を唱えた石橋湛山（いしばし）についても克明に足で調べ、その足跡を書き上げている（『石橋湛山と小国主義』岩波書店）。

●故郷信州への想い

一九七七（昭和52）年、「もう二度とわたしは校歌をつくることはないだろうと、心に決めて」野沢南高校の新歌歌を作詞（『野沢南高等学校百年史』、一九九五（平成7）年には信州の歴史・風土・人をフィールドワークによって考察する「信州学（シナノロジー）」の試みを『信州奇人考』（平凡社）として刊行した。信濃毎日新聞の「コラム『今日の視角』」にも一五〇回以上寄稿した。

また、市民の文化運動から始まり、岩波書店、信濃毎日新聞、須坂市などが協力して平成11年に

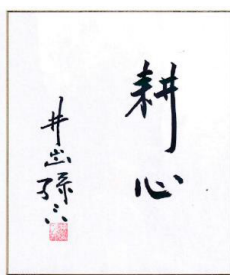


第7回信州岩波講座（2005年）
小田実と対談（信濃毎日新聞提供）

始まり、現在も続く信州岩波講座では、創設時から一〇年間にわたって企画監修者を務めた。さらに、平成22年から始まった『佐久の先人』刊行では、第三次まで監修者を務めた。

●「耕心」

戦争を二度と起こしてはならないという信念は最期まで揺らぐことはなかった。色紙を頼まれたとき、井出が好んで認めていたのが「耕心」という言葉であった。「耕心」は、自らを律し、真を追求するために、絶えず心を耕し続けたという思いが込められた井出の造語である。



井出孫六 耕心

（山口昭男）

参考文献

井出孫六『中国残留邦人』岩波新書、二〇〇八年
山口昭男編『耕心 井出孫六の希い』私家版、二〇二三年

佐久の先人たち⑥7

多彩に活躍した
作詞家・脚本家・舞台構成作家

やまかわ けいすけ
山川 啓介

(本名：井出 隆夫)

(1944～2017)



学生時代から活動を始め、作詞や脚本、舞台構成など多彩に活躍。NHKテレビ『おかあさんといっしょ』では「北風小僧の寒太郎」を始め、膨大な数の詞を書き、着ぐるみ人形劇の脚本や作詞を担当した。佐久市民の歌や校歌・園歌など地元にも歌詞を残した。

友からの信望が厚かった。

●夢をもち、活動を始める

上田高校時代、テレビ番組「夢であいましょう」に爽やかな突風を受けたような感動を覚え、「音楽番組を作りたい」「上を向いて歩こう」のような作詞家になりたい」と思うとともに、ラジオの深夜放送を聴いてミュージカルの脚本家になる夢を抱くようになった。

早稲田大学入学直後から創作ミュージカル研究会の台本や作詞、友人のバンドの作詞に関わるなかで、東芝レコード会社にも出入りし、友人の名前を組み合わせで決めたという山川啓介名で英語詞の下訳をした。「訳詞は、原作者の哲学を自分の言葉で表現するもの」との持論をもって取り組み、作詞家の岩谷時子から「この人センスがある」と褒められて、自信がもてたという。

●作曲家いずみたくの事務所で才能を磨く

大学卒業後、フリーでミュージカルの台本や詞を書いていたころ、山川が脚本したミュージカルをいずみたくが高く評価し、CMソング作りで多忙な山上路夫と仕事をしたときも山上から褒められ、いずみたくの事務所の一員になった。三船敏郎の「男は黙ってサッポロビール」を山川が制作したとき、「これいいねえ。レコードにしようよ」といずみに認められ、「男が旅に出る時は」の曲名で、作詞家としてレコードデビューを果たした。

その後もいずみの推薦で、三〇年近くテレビ番組

「題名のない音楽会」の構成を手がけていた作詞家・演出家の藤田敏雄の助手になって、必要とするすべての資料探しや訳詞をするなどたくさんの仕事をやり遂げた。学びも大変多く、山川にとって藤田は師と仰ぐ存在であった。

いずみたく、山上路夫、藤田敏雄など、尊敬や憧れを抱いた人々とのお互いの貴重な経験をとおり、山川は才能を磨くとともに、才能の「引き出し」をたくさん持ち、昭和45年、26歳で独立した。

●独立し、多彩に活躍

いずみたくの事務所に入りし始めたころ入社してきた満と、昭和46年に結婚。「清々しい気持ちにさせてくれる」と満が山川の詞に目をとめたことがきっかけだった。昭和58年2月からは、家族とともに軽井沢に居住し、そこを拠点に仕事をしていた。

日本一の訳詞家になることも目指しつつ「プロになるには、個性と技術の両方が必要だ」との信念をもって舞台の企画・構成・台本、ミュージカルの脚本・作詞など誠実な姿勢で仕事をした。

「舞台構成は自分の本業だ」という自負のもと、独立直後から二五年間、「由紀さおり&安田祥子の



昭和46年夏
松原湖畔にて
新婚の頃の山川

●感性豊かに遊び、学ぶ

山川啓介（本名井出隆夫）は、一九四四（昭和19）年10月26日、春日国民学校（現望月小学校）訓導で歌人であった父悦夫、母京子の二人兄弟の長男として南相木村の母の実家で誕生し、幼少期は自然豊かな北牧村松原（現南佐久郡小海町）で過ごした。

信州大学教育学部附属長野小学校に入学し、父の転勤により4年時に中込小学校に転校した。幼児期から読書家で探究心が旺盛であった。中込中学校では、第五代学友会長（生徒会長）を務め、学

童謡「コンサート」の企画・構成などを担当した。他にも森山良子を始め、多くの舞台の構成を手がけた。

大好きなミュージカルでは、「ガンバの大冒険」「ふたりのロッセ」「にんじん」など物語の世界観の表現が深く、人物の心情表現が鮮やかな作品を多く残した。

また、平成23年3月からは、NHKテレビで放送され、人間と人形の掛け合いによるトークと歌で構成された子ども向け教養番組「フックブックロー」の脚本と作詞を担当した。

●膨大な数の楽曲を手がける

「太陽がくれた季節」「ふれあい」「時間よ止まれ」「銀河鉄道999」「聖母たちのララバイ」「宇宙刑事ギャバン」「百万本のバラ」を始めとする歌謡曲・ポップスや子ども向けの歌などさまざまなジャンルの作詞や訳詞を手がけた。

昭和42年から五〇年間、本名の井出隆夫名でNHKテレビ「おかあさんといっしょ」の脚本や作詞を担当。本名を使った背景に、「幼児の気持ちになり、表現や言葉などの発達の助けになる楽しい番組をつくる」という山川の心情がうかがえる。原案から関わった着ぐるみ人形劇の「にこにこ、ぷん」と「ドレミファ・どくなつー」では、一八年間で三五〇〇話を超える友情と勇気あふれる脚本と詞を書き、詞も人形も愛された。数多いヒット曲の中

でも、福田和禾子との名コンビで作り、「みんなのうた」で紹介された「北風小僧の寒太郎」は山川の代表作。幼少期に遊んだ松原で、電信柱に耳を当てて風の音を聴いた体験から生まれたという。平成24年10月、「北風小僧の寒太郎」の歌碑が、小海町により松原湖畔に建立された。



平成 24 年 10 月歌碑の除幕式で
作曲者の遺影を持って
感謝を述べる山川

●市民や子どもたちへの作詞

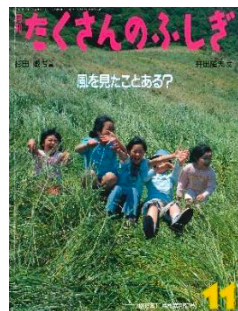
佐久市は昭和56年、「市政施行二〇周年記念事業」の一環で「市民の歌」を作ることにし、曲を神津善行に、詞を山川啓介に依頼した。山川は、市民が故郷に誇りを持って歌い続けるようにと、美しい山々や千曲の流れ、歴史等を歌詞に織り込んだ。

また、佐久市内の小学校の校歌や保育園歌の作詞も手がけた。東小学校（平成3年3月）、望月小学校（平成21年2月）、佐久平浅間小学校（平成27年2月）の校歌は、先にできた立科小学校校歌（昭和54年）が評判を呼び、それぞれ開校時に依頼された。小雀保育園園歌（昭和58年10月）は、二男の在園時代に作詞した。

●幼少期から「風」が好き

『月刊たぐさんのふしぎ』平成18年11月号「風を

見たことある？」では、さまざまな「風」をとらえた写真に詞を添え、「風を見ることは生きること豊かにしてくれることのひとつ。こころが柔らかくなうちにたくさん風を見てほしい」と語っている。



『月刊たぐさんのふしぎ』
平成 18 年 11 月号
(福音館書店)

また、平成28年4月から翌年3月に「信濃毎日新聞」で二回に渡り連載した「思索のノート『めぐり会った歌たち』」の最終回（3月11日）に、「風は見えないけれど、命あるもののように頬を撫でて通り過ぎてゆく。風を感じた時、自分の小ささを感じ、時にはさやかな幸福感も感じる」と書いている。これらから、山川の詞の中核に、幼少期に受けた「風」があることがうかがえる。

連載執筆終了直後から闘病生活になり、平成29年7月、幅広いジャンルでの活躍を残して、旅立った。享年72。

参考文献
(中島瑞枝)

CDアルバム「リリシスト」山川啓介ソングブック」付属ブックレット
写真提供：井出満氏

佐久の先人たち⑥8

難病と闘い続けた
シンガーソングライター

つちや りゅういち
土屋 竜一

(1964 ~ 2020)



デュシェンヌ型筋ジストロフィーと闘いながら、シンガーソングライターとして活躍。車いすのソングバードと呼ばれた。人工呼吸器を装着してから作曲家として、またエッセイストとしてなど多方面で活動が続けた。

病デュシェンヌ型筋ジストロフィー、母は、きいた直後、病院の廊下で待つ竜一にそのすべてを告げたという。

昭和52年、浅間中学校に入学。片道2kmを徒歩で通ったが、転ぶとすぐに立てないなど症状は進行していった。修学旅行も止められ、地元高校への進学を熱望したがそれもかなわなかった。「絶対に病気に負けない。病気でない僕は存在しない。病気を理由に人生を棒に振るなら、命をくれた両親に申しわけがたない」『出会いにはたからもの』。この思いは竜一の心奥に存在し続けた。卒業式は車いすで出席した。

●表現者、音楽家としての才能を発揮

昭和55年4月、車いすの竜一は長野西高等学校通信制に入学、4年生のときに、第三回全国定時制通信制生徒生活体験発表大会で「通信制で学んだこと」を発表し文部大臣賞を受賞した。入学当初は普通高校に進学できなかった悔しさや通信制の学習に物足りなさを感じていた竜一が「勉強というのは、与えられてやるものではなく、求めてやるものである。通信制での四年間は僕の人生にとって、第二の誕生といってもよいくらいの価値のあるものだ」と記した。

音楽活動のきっかけは16歳、「筋ジスの青年」の詞に竜一が曲をつけた「空が待っている」が佐久で行われたわたぼうし音楽祭に入選したことである。

それからは楽譜も和音も作れなかった竜一が、驚くべき速さで楽曲を生み出した。

20歳で音楽室を

借りて初のソロ・

コンサートを開催

し、翌年には二〇

人の仲間たちと、

佐久創造館で観

客五〇〇人のコン

サートを開催した。

その後も、シンガーソングライターとして、コンサ

ートや歌のある講演など精力的に活動し、いつしか

車いすのソングバードと呼ばれた。竜一は、「コン

サートは応援してくれる人々や、仲間との出会いの

場だ」と語った。その思いは、昭和60年発表の楽曲「出

会いはたからもの」に表れている（後に同名のエッ

セイ本も出版）。

八千穂保育園か

らの依頼で作曲し

た「のびのび保

育園」がデビュー作

である。その後二〇

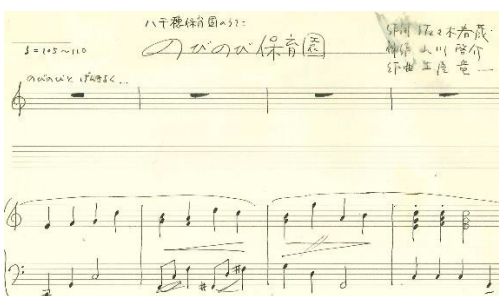
年にわたり、数百

の楽曲を制作し、

地元の学校や保

育園にも作品を提

供



「のびのび保育園」作詞佐々木春蔵
補作山川啓介（1986年）



5周年記念のソロ・コンサートで
歌う竜一（1989年）

し続けた。

一九九一（平成3）年、ラジオパーソナリティである広沢里枝子^{ひろさわ りえこ}が作詞し、竜一が曲をつけた「街に
でよう、キュリー」は、第16回全国わたぼうし音楽
祭大賞を受賞した。

●気管切開の選択と新たな出会い

メジャーデビューを目指していた平成6年、竜
一は呼吸不全により医師から気管切開を促された。
それは声を失うことを意味し、彼にとって大きな挫
折である。

しかし、希望は途絶えなかった。かつての担当医
師が、人工呼吸器を装着しても肉声で発声できる
スピーキングバルブの存在を伝えてくれたのだ。平
成10年、強い呼吸困難に襲われ気管を切開し、24
時間人工呼吸器をつけての生活となったが、この器
具により話す術を得た。その後竜一は、同じ病気で
苦しむ人のためにと、スピーキングバルブの成果を
発表、英語版も作成し、その内容は浅間総合病院
でも紹介された。

竜一は、常に新しいチャレンジを続けた。その一
つ、弟に促され、ホームページ制作を学んでいたと
きである。たまたま「チャップリンの映画を探して
いる」という投稿を目にした。それは生涯の伴侶と
なる人、金子美和のものだった。美和は札幌、竜一
は佐久、メールやチャットで交際を続け、二年後の
平成12年結婚し、その後長女と長男を授かってい

る（『神様からの贈り物』二〇〇二年）。

●会社員、表現者、父親として生きる

平成16年、二児の
父となった竜一は、
「山のように大きな
父親になりたい」と、
平成18年株式会社
沖ワークウエルの在
宅社員として就職を
果たした。重度障が
いのある同僚のプロ



箸を使い執筆（入力）する
竜一（2009年）

フェッショナルな仕事ぶりは衝撃であり、給与や社
会保険など、会社員として社会の一員だという実
感は、芸術の世界で生きてきた竜一の新たな喜びと
なった。「決してあきらめない」を信条とした竜一は、
後に「可能性を引き出すには、それなりの冒険と
努力が必要だ」と記している（社会福祉法人日本
肢体不自由児協会『はげみ』No.三九一、令和二年四
月）。

「障害があっても働けるこの会社を社会に知らせ
たい」と右の小指一本しか動かない状態で障がい
のある社員を取材し、平成22年『日本でいちばん働
きやすい会社』を出版した。「歌い手が声を失った
その絶望を知っているから、私は、同僚の思いを書
くことができた」と語った。

平成26年9月、竜一は佐久平交流センターで50歳

記念のコンサートを開催した。竜一がわが師と語
る旧知の作詞家山川啓介の助けもあった。歌は五
代目うたのおにいさん林アキラらが歌い、会場は
超満員だった。竜一はスピーキングバルブを装着
しトークで出演し、次は還暦コンサートを、と夢
を語った。

常に新しい挑戦をする竜一は、平成29年からは
俳句も始め、俳句を虹魚^{にじいさ}とした。

天の川^{わがれ}もかがやく欠片^{かけら}なり 土屋虹魚

広大な天の川を見ている吾も星の欠片の一つ。誰
でも輝けるんだ（『梟』第三五号、平成29年8月）

平成30年に、自身の子ども時代を元にした初の
児童書『ぼくにできること』を完成。出版記念の「そ
よ風の朗読会」では、三〇〇人の観客を迎え、満
足のパフォーマンスができたと言った。

二〇二〇（令和2）年5月20日、急性心不全に
よりこの世を去った。享年55。

（黒沢梢）

参考文献

土屋竜一『出会いはたからもの』フーコー、一九九九年

SBCラジオ「里枝子の窓」インタビュー、二〇〇八年

～二〇二〇年

（写真提供：遺族）

【これまでの「佐久の先人」事業の歩み】

平成 22 年度に始まった「佐久の先人検討事業」は、「佐久の先人(一)」(第一次、第二次)、「佐久の先人(二)」(第三次)の発刊を経て、今回の第四次選定を皆様にお届けするに至りました。

これまで多くの市民の皆様にご温かい支えをいただきながら、総勢 68 名の素晴らしい郷土の系譜を編み進めてこられましたことに、深く感謝申し上げます。

先人たちが遺した功績や地域の礎は、これからも 未来の佐久を担う世代へと大切に語り継がれていきます。

佐久の先人一覧 (第一次～第三次)

第一次 (平成 24 年選定)			
1	いちかわ 市川 五郎兵衛	1572 ~ 1665	用水掘削の祖
2	うすだ 臼田 丹右衛門	1776 ~ 1857	佐久鯉を改良した
3	いちかわ 市川 代治郎	1826 ~ 1896	旧中込学校を建てた棟梁
4	おぎゅう 大給 恒	1839 ~ 1910	五稜郭築城と博愛社 (後の日本赤十字社) 創設
5	こうづ 神津 邦太郎	1865 ~ 1930	西洋式牧場をつくった
6	さとう 佐藤 寅太郎	1866 ~ 1943	信州教育の充実に尽した教育者
7	おおい 大井 富太	1868 ~ 1928	佐久鉄道をつくった
8	こうづ 神津 藤平	1871 ~ 1960	ふるさとを想い志賀高原と命名した実業家
9	ひだい 比田井 天来	1872 ~ 1939	現代書道の基礎を築いた書家
10	さくらい 桜井 弥一郎	1883 ~ 1958	早慶第一戦の勝利投手
11	かわむら 川村 吾蔵	1884 ~ 1950	アメリカで活躍した彫刻家
12	こばやし 小林 多津衛	1896 ~ 2001	平和と民芸を語り続けた教育者
13	たかわ 田河 水泡	1899 ~ 1989	のらくろ描いて半世紀
14	まるおか 丸岡 秀子	1903 ~ 1990	農村女性の解放に生涯をささげた
15	やまむら 山室 静	1906 ~ 2000	アンデルセンやムーミンを日本に紹介した詩人
16	たけうち 竹内 好	1910 ~ 1977	日中友好に尽した文学者
17	わかづき 若月 俊一	1910 ~ 2006	農民とともに地域に生きた医師
18	い で 井出 一太郎	1912 ~ 1996	清廉一筋の歌人政治家
第二次 (平成 25 年選定)			
19	こばやし 小林 まごさえもん 孫左衛門	1721 ~ 1756	宝暦騒動の中心的農民
20	まつもと 松本 たにきち 谷吉	1836 ~ 1923	日本で初めてカラマツ育苗を成功させた
21	しみず 清水 清吉	1848 ~ 1902	
22	いちかわ 市川 またぞう 又三	1838 ~ 1909	明治政府に尺度統一を建白した
23	よだ 依田 かどう 稼堂	1851 ~ 1914	塾を開いて漢詩文を教えた先生

24	おかむら まさこ 岡村 政子	1858 ~ 1936	明治の先端を生きた石版画家
25	せしも きよし 瀬下 清	1874 ~ 1938	信州財界の救世主
26	しのはら わいち 篠原 和市	1881 ~ 1930	全生涯を小海線全通に
27	こうづ たけし 神津 猛	1882 ~ 1946	佐久の文化と産業を支えた
28	こいけ もりたろう 小池 森太郎	1887 ~ 1933	佐久に自動車交通網を築いた
29	こいけ ゆうすけ 小池 勇助	1890 ~ 1945	女子学徒の命を救った軍医
30	やなぎもと 柳 本 みの	1894 ~ 1976	3,000人を超える赤ちゃんをとりあげた助産師
31	もりいづみ たけしげ 森泉 武重	1903 ~ 1988	平根発電所と浅間病院の創設に貢献した
32	なかざわ しゅうぞう 中澤 周三	1907 ~ 1991	五郎兵衛用水中興の祖
33	そうま せんし 相馬 遷子	1908 ~ 1976	医師のかたわら、中央俳壇で活躍した俳人
34	たなか ふみお 田中 文雄	1910 ~ 1998	緑とともに生きた生涯 王子製紙社長
35	よしざわ くにお 吉沢 國雄	1915 ~ 2008	インスリン自己注射への道を開いた医師
36	まつい こうせい 松井 康成	1927 ~ 2003	人間国宝に認定された陶芸家
第三次（平成 27 年選定）			
37	せしも のぶただ 瀬下 敬忠	1709 ~ 1789	江戸時代中期の俳人・歴史家
38	さとう さいか 佐藤 採花	1844 ~ 1901	幕末・明治を生き抜いた女流俳人
39	こまつ はじめ 小松 大	1848 ~ 1895	地域づくりと自由民権に生きた医師
40	はやかわ ごんや 早川 権弥	1861 ~ 1921	佐久の自由民権運動を实践した政治家
41	おかべ じろう 岡部 次郎	1864 ~ 1925	ハワイ日本人移民団に尽した政治家
42	ともの ぶんたろう 伴野 文太郎	1869 ~ 1934	小学校教員で融和教育の先駆者
43	かわむら はちろう 川村 八郎	1881 ~ 1961	戦後いち早く福祉事業を進めた町長
44	みつし かつごろう 三石 勝五郎	1888 ~ 1976	佐久の生んだ大詩人
45	こうづ こうじん 神津 港人	1889 ~ 1978	佐久の洋画のパイオニア
46	あべ りょうたろう 阿部 良太郎	1894 ~ 1966	警廃事件で政治にめざめた浅間町長
47	きうち たかね 木内 高音	1896 ~ 1951	宮澤賢治の才能を見出した童話作家・編集者
48	いわた けんじ 岩田 健治	1897 ~ 1961	子ども・農民・村を愛したヒューマニスト
49	しみず たかじろう 清水 鷹次郎	1899 ~ 1931	大正に設立されたプロ野球団の主力選手
50	さくらい わいち 桜井 和市	1902 ~ 1986	ドイツ語学者の学習院長
51	ゆい いちじ 油井 一二	1909 ~ 1992	故郷に美術館を贈った実業家
52	よだ いさお 依田 勇雄	1911 ~ 1993	財政再建を成し遂げた初代佐久市長
53	かしやま まこと 榎山 信	1913 ~ 1979	戦後、佐久工業界の起業パイオニア

【佐久の先人（一）、（二）販売中】

「佐久の先人（一）」・・・(第一次、第二次掲載) 500 円 (税込)

「佐久の先人（二）」・・・(第三次掲載) 500 円 (税込)

販売場所

佐久市役所南棟 3 階文化振興課、川村吾蔵記念館、五郎兵衛記念館、天来記念館、
望月歴史民俗資料館、中央公民館、浅間公民館、野沢公民館、中込公民館、東公民館、
臼田公民館、浅科公民館

※各施設の休館日や開館時間等は事前にご確認ください。

佐久の先人検討委員会

監修者

伊藤 純郎 (委員長)

小木田 順子

委員

田澤 直人 (副委員長)

市川 包雄

黒沢 梢

篠原 由美子

新海 節生

大工原 千恵

福島 邦男

柳澤 礼子

問合せ

佐久市教育委員会 社会教育部 文化振興課

☎ 62-5535 FAX 64-6132

Mail bunkasinko@city.saku.nagano.jp